

栗林遺跡

第 X 次

発掘調査報告書

1993年3月

中野市教育委員会

序 言

栗林遺跡は、弥生時代の中期から後期にかけての、長野県北信地方の標識土器「栗林式土器」が出土しており、昭和35年に県の指定史跡になっております。中部地方北部の重要な遺跡として、学問的に注目されています。

今回の調査で、弥生時代中期後半の土器が出土した遺物集中部12ヶ所と3住居址が発見されました。この時代の集落史を検討する上に大きな成果を得ることができました。

今回の調査にあたり、御指導くださった長野県教育委員会をはじめ長野県埋蔵文化財センター、御協力くださった地元栗林区の皆様、作業に携わった方々に心より感謝いたします。

今後とも、当市の埋蔵文化財に対する、深い御理解と御協力をお願いいたします。

平成5年3月

中野市教育委員会

教育長 嶋田春三

例 言

1. 本書は、長野県中野市栗林区内に所在する県史跡栗林遺跡の埋蔵文化財の発掘報告書である。
2. 調査は、長野県土地改良課が施行する栗林県営地帯総合土地改良事業の中野道路改良事業の工事に伴い、中野市教育委員会が実施した。
3. 調査対称面積：400m²
4. 調査面積：400m²
5. 発掘調査及び整理報告書作製期間：平成4年11月—平成5年3月26日
6. 調査員：中島英子・壇原長則・池田実男
7. 本報告書の執筆：中島英子
8. 本報告書の編集：中島英子
9. 発掘から報告書作成に到る過程で、次の方々や機関から御教示・御協力いただいた。記して謝意を表したい（敬称略 順不同）。
鶴田典昭 岡村秀雄 赤塩仁 酒井健次 齊藤久美 北信地方事務所土地改良課 長野県埋蔵文化財センター 西部土地改良区 中野市栗林区
10. 発掘調査・整理参加者
石川高義 石川与喜江 小野沢京二 小野沢智子 金井幸子 小林佳仁 高橋ただし 壇原重安 壇原みら江 常田誠 内藤年男 中島宏 樋口アイコ 樋口政勝 樋口義政 古田茂 増田悦子 松野良子 丸山せつ子 宮本せつ子 宮本つた子 湯本栄一 涌田茂輔

〈調査団組織〉

調査団長		金井汲次
調査員		中島英子
同		壇原長則
同		池田実男
事務局	中野市教育委員会教育長	嶋田春三
	同 教育次長	佐藤嘉市
	同 歴史民俗資料館管理係長	池田 剛
	同 同 学芸員	徳竹雅之

目 次

序 言

例 言

目 次

I 遺跡の概観

1 位置と立地	1
2 周辺の遺跡分布	1
3 調査方法と基本層序	4

II 検出された遺構と遺物

1 遺 構	5
(1) 遺物集中部	5
(2) 住居址	14
(3) 帯状礫群	15
2 遺 物	15
(1) 土器・土製品	15
(2) 石器・石製品	32

III まとめにかえて

37

表 目 次

第1表 出土土器・土製品計測表	31
第2表 出土石器・石製品計測表	35

挿 図 目 次

第1図 栗林周辺の遺跡	2
第2図 栗林遺跡位置図	3
第3図 グリット配置図	4
第4図 遺物集中部出土状態(1)	6
第5図 遺物集中部出土状態(2)	7
第6図 遺物集中部出土状態(3)	8

第7図	第12集中部 13号住 14号住 15号住	9
第8図	第13～15号住居遺物出土状態	10
第9図	第8遺物集中部出土状態	11
第10図	第9遺物集中部出土状態	12
第11図	第10遺物集中部出土状態	13
第12図	土器、土製品実測図	21
第13図	第1～5遺物集中部出土土器拓影	22
第14図	第5～8遺物集中部出土土器拓影	23
第15図	第8、9遺物集中部出土土器拓影	24
第16図	第9遺物集中部出土土器拓影	25
第17図	第9、10遺物集中部出土土器拓影	26
第18図	第10遺物集中部出土土器拓影	27
第19図	第10遺物集中部出土土器拓影	28
第20図	第10遺物集中部出土土器拓影	29
第21図	第11、12遺物集中部、第13、14号住出土土器拓影	30
第22図	第14、15号住出土土器拓影	31
第23図	石器(1)	32
第24図	石器(2)	33
第25図	石器(3)	34

図版目次

第1図版	上、調査前 下、第2集中部出土土器
第2図版	上、溝断面 中、第2、3集中部 下、第2集中部
第3図版	上、第4集中部 中、第5集中部 下、第6集中部
第4図版	上、第8集中部東側より 下右、蓋と小形壺 下左、第7、8集中部
第5図版	上、第9集中部出土状態 下、蓋と鉢の出土状況
第6図版	上、第10集中部出土状態 下、第11、12集中部プラン確認状況
第7図版	上、第10集中部鉢 下、甗
第8図版	上、第11、12集中部プラン確認(東側より) 下、13号住発掘風景
第9図版	上、遺物出土状況13、14号住 中、14号住 下、15号住
第10図版	上、第14号住 中、13、14、15、号住 下、完掘(南方向より)

I 遺跡概観

1 位置と立地

栗林遺跡は長野県中野市高丘栗林地籍に所在する。中野市は長野県の北部、長野盆地の北端に位置する。長野盆地は南北30Km、東西10Kmに及ぶ広大な沖積平野をもち、中央部には信濃川が北流する。その長野盆地は栗林遺跡の所在する中野市付近で急速にその幅を収束し、北に位置する飯山盆地と一線を画する。それにともない、盆地のほぼ中央を北流してきた信濃川は盆地の北西を画する山地の裾部を嵌入蛇行しながら北流する。両岸には何段かの河岸段丘が形成される。嵌入により、北西部の山地裾部は東西に分断され、東岸側は信濃川に沿って延びる細長い丘陵地形となる。

栗林遺跡は信濃川が嵌入蛇行をはじめる入り口部分、東岸に形成された丘陵の裾に形成された河岸段丘面上に位置する。信濃川が栗林遺跡付近で大きく蛇行するため、遺跡の位置する部分では河岸段丘は北東方向に形成されている。また、上下二段の河岸段丘を認めることができる。下位の段丘面上には段丘の縁に沿って、遺跡が立地する自然堤防状の微高地が認められ、その背後には後背湿地状の低地が形成されている。

微高地は南西から北西の方向に、長さ600m、幅150mを測る細長い地形となり、両端を小河川で分断されている。遺跡はこの微高地全体に分布すると推測される。今回の調査区は微高地のほぼ中央を横断するように設置されている。

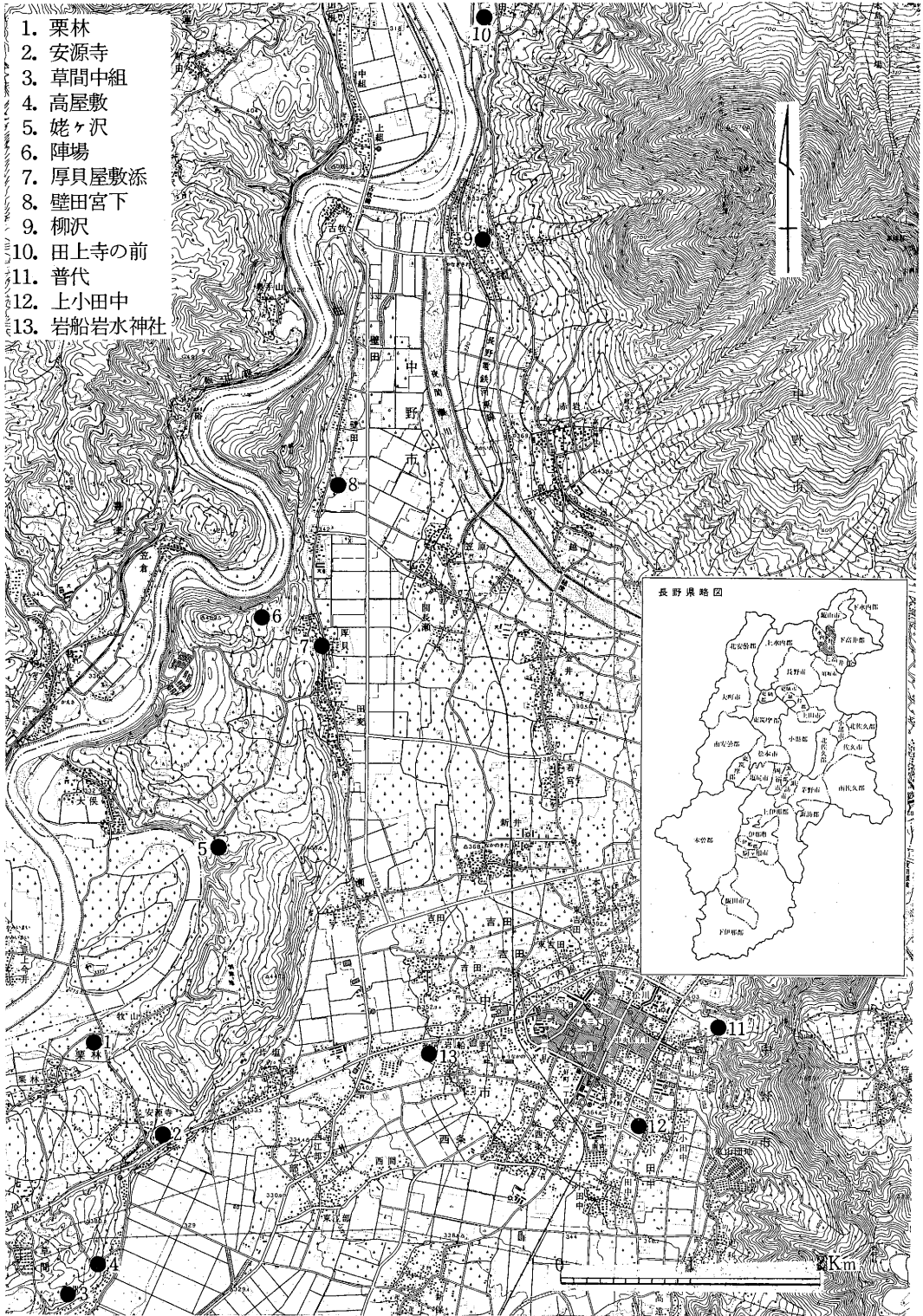
2 周辺の遺跡分布

本節では市域の弥生時代の遺跡の分布を概観しておきたい。

中野市は長野盆地の北端にあたり、盆地の東西を画する山地が狭まり、長野盆地が収束する部分にあたる。北に向かって収束する東西の山地地形、その山麓に形成された急峻な小扇状地、収束する山地間の沖積面全体を覆うように形成された扇状地（東側山地から流れる河川による）、その扇状地の扇端を画するように南北に延びる丘陵（長丘丘陵）、扇状地の南側に位置し長野盆地に面する沖積低地（延徳沖）などから構成される。

弥生時代の遺跡の分布は地形的に四つの群に分けて考えられそうである。1) 中野市南部の沖積低地に面した東側山地の急峻な扇状地上に営まれるもの、2) 扇状地の湧水帯に沿って分布する一群、3) 北部の東側山地の急峻な扇状地上に位置する一群、4) 丘陵に分布する一群である（第1図）。

また、これらの地形的な群を越えて、沖積低地（延徳沖）の周囲をめぐるように弥生時代中



第1図 栗林周辺の遺跡



1. 第1次発掘地点 昭23(1948)
2. 第2次発掘地点 昭25(1950)
3. 第3次発掘地点 昭45(1970)
4. 第4次発掘地点 昭55(1980)
5. 第5次発掘地点 昭56(1981)
6. 第6次発掘地点 昭56(1981)
7. 第7次発掘地点 昭58(1983)
8. 神田五六遺物採集地点
9. 第8次発掘地点 平3(1991)
10. 第9次発掘地点 平4(1992)

第2図 栗林遺跡位置図

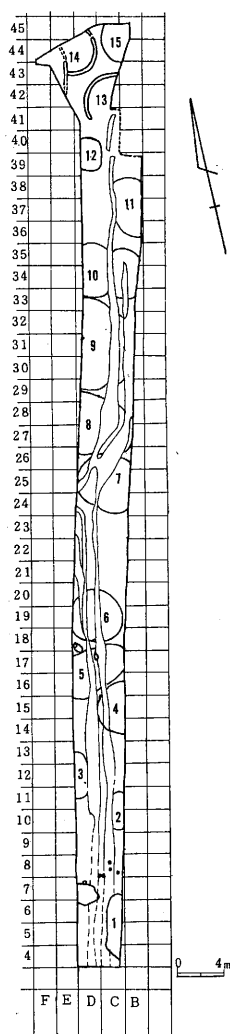
期栗林期の遺跡が分布しているようにも見える。生産域と集落立地の関係を示すも一群として把握できるのかも知れない。

いずれにしろ、当該期の遺跡分布のあり方をマクロな視点から分析し、市内に於ける弥生時代中期、後期の集落の相互関係や土地利用のあり方を分析することが必要になる。今後の研究の進展を待ちたい。

栗林遺跡は4)丘陵に位置する部類に属するが、先述した沖積低地(延徳沖)とは丘陵を挟んで反対側に位置する。近接する地域での遺跡については不明な点が多い。現在明確に知られているのは、栗林遺跡の東南の高位段丘面に位置する弥生後期箱清水期の大集落のみである。

栗林式土器に後続する段階から古墳時代初頭まで継続している。

しかし、近年、栗林遺跡周辺では高速道路建設、通称オリンピック道路建設に伴う広範な発掘調査が県埋蔵文化財センターによって進められており、周辺遺跡のあり方が明らかにされつつある。今後、栗林遺跡と周辺の遺跡群との相互関係や分布のあり方が明らかにされるであろう。



3 調査方法と基本層序

今回の調査は道路工事によって削平される部分にのみ限った調査である。したがって、遺物の出土状況から住居址等の遺構の存在が予測されたり、落ち込みが確認されたとしても、調査を終了し、工事によって影響を受けない下位部分はそのまま保存した。

以上のような調査のため、調査区内では基本層序をえることができず、調査区の北に隣接する旧道路の切り通し断面を基本層序とした。

第I層 表土 10から30cmの厚さをもつ。

第II層 茶褐色土、30cmの厚さをもつ。

第III a層 黒褐色土層、約40cm程の厚さをもつ。弥生時代中期の土器を包含する。

第III b層 黒色土層、弥生時代中期の遺構の覆土。

第IV層 黄色粘質土層、遺物は包含されていない。

第V層 黒茶褐色粘質土。

第3図 グリッド配置図
(S=1/600)

II 検出された遺構・遺物

1 遺 構

今回の調査は先述したように道路工事によって削平される部分に限ったものである。したがって、遺構は完掘していないものが大半である。

弥生時代中期の竪穴住居址3軒、遺物集中部12ヶ所、性格不明の帯状の礫群1基を検出した。遺物集中部は竪穴住居の覆土内の遺物出土状況と酷似している。おそらく、その広がり的大小等からみて、住居を満たす覆土内の遺物が露呈したものであろう。ぼんやりとした落ち込みのプランが確認できるものもある。

このように遺物集中部は竪穴住居址を示唆すると考えられるが調査区内には様々な溝が設置され、しかも調査区は幅が狭く、集中部として明確に認知できない部分もある。本報告ではこうした分布の不明瞭な部分についても、あえて遺物集中部として説明した。ご容赦願いたい。

(1) 遺物集中部

1号遺物集中部（4図1）

位置 4～6・Cグリット

プランの確認 径6.8mの円形のプランと考えられるが、西側半分は調査区外。

遺物出土状況 少量。

2号遺物集中部（4図2）

位置 9～11・Cグリット

プランの確認 西側部分に円形のプランの一部を確認した。調査区の中央部が溝で攪乱され、全体は不明。

遺物出土状況 南北4m×東西2m。

3号遺物集中部（4図2）

位置 9～13・Dグリット

プランの確認 攪乱多く不明。

遺物出土状況 南北7m×東西0.6m（攪乱あり）。北西部に集中。

4号遺物集中部（4図3）

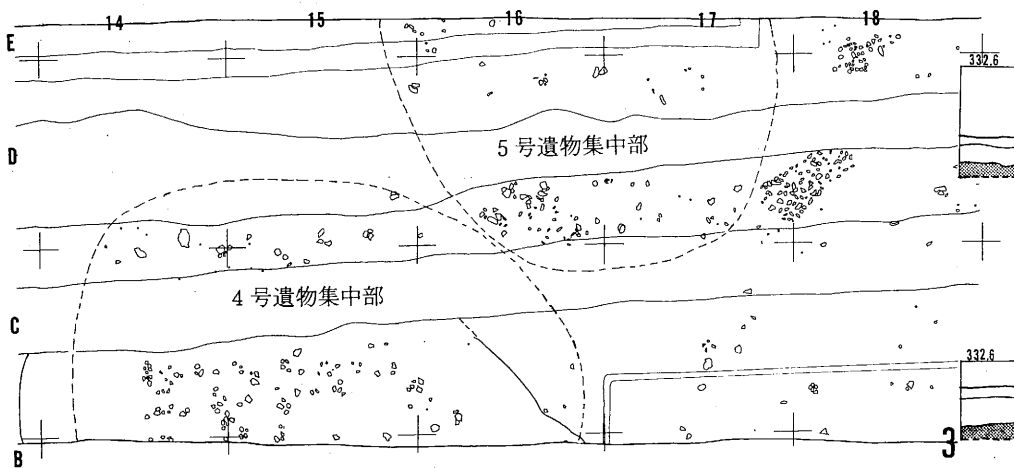
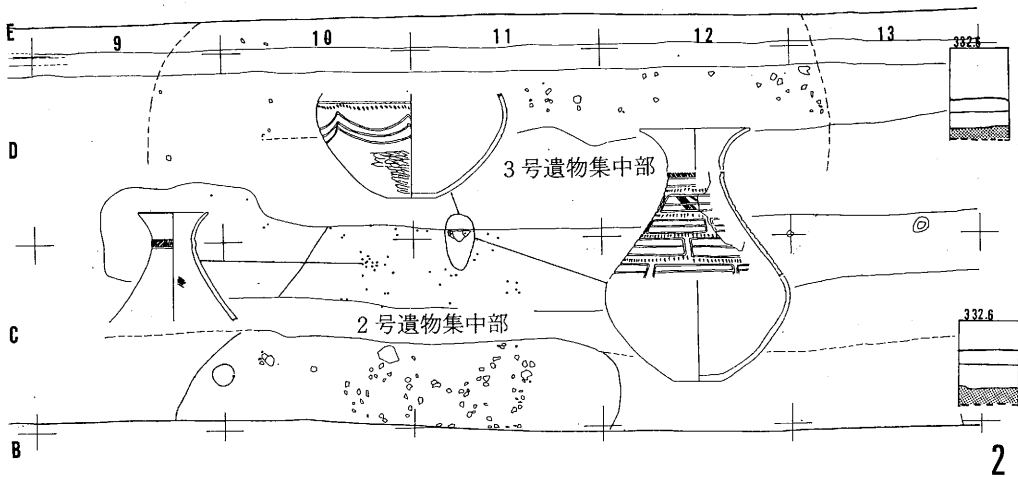
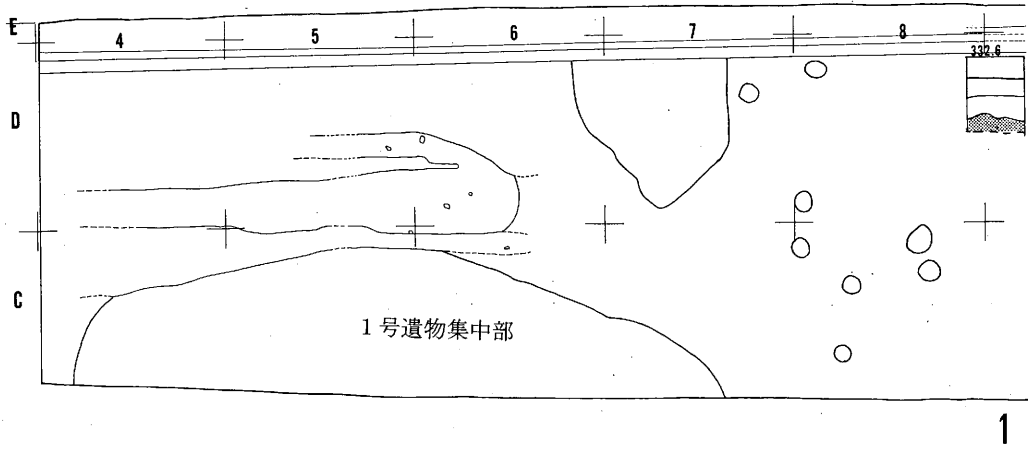
位置 14～16・Cグリット

プランの確認 東部に円形プランの一部。遺物集中部より1m程の距離を置き、取り囲むように存在。他は攪乱の為不明。径約6mの円形か。半分は調査区外。

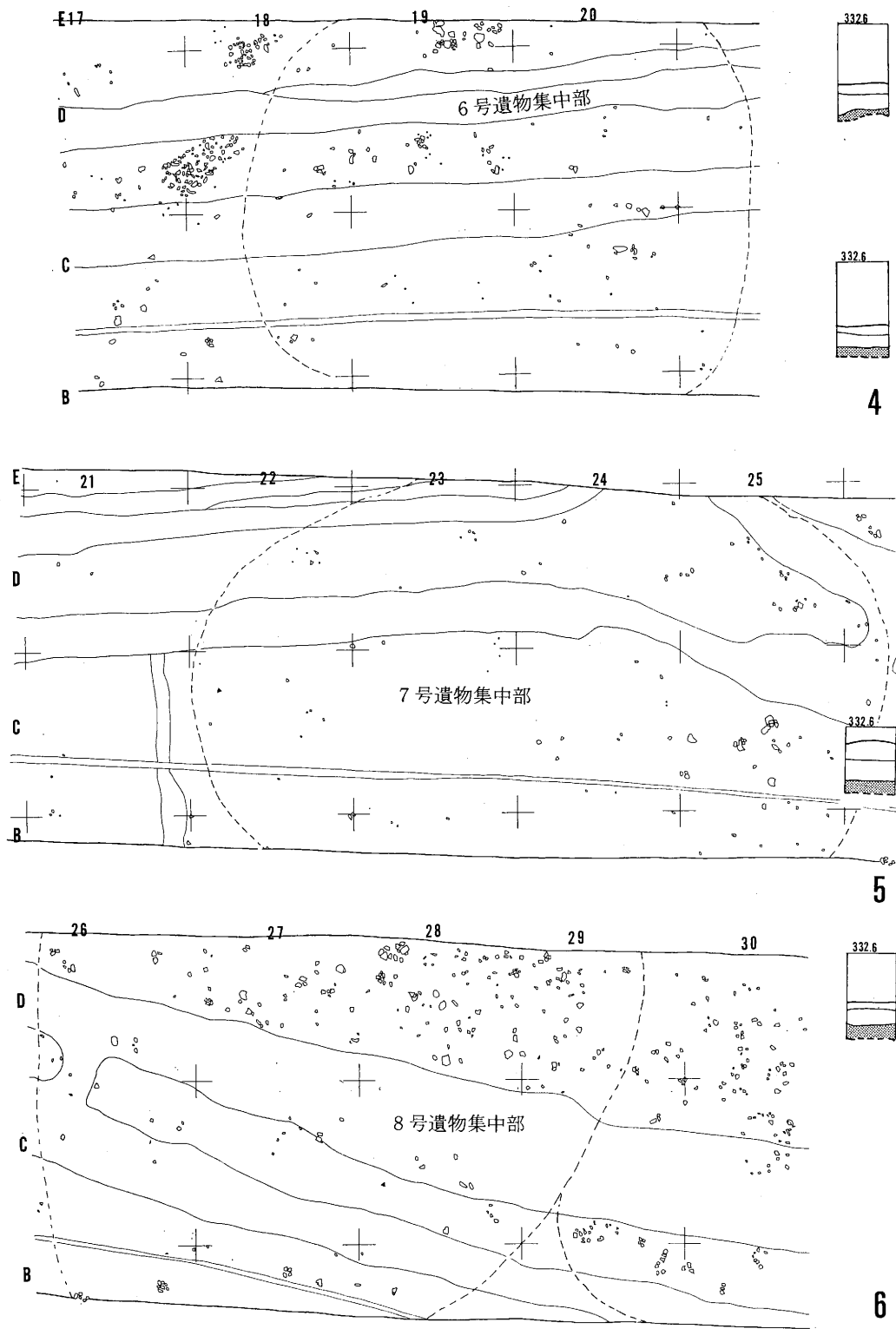
遺物出土状況 南北5m×東西2.5mの半円形。

5号遺物集中部（4図3）

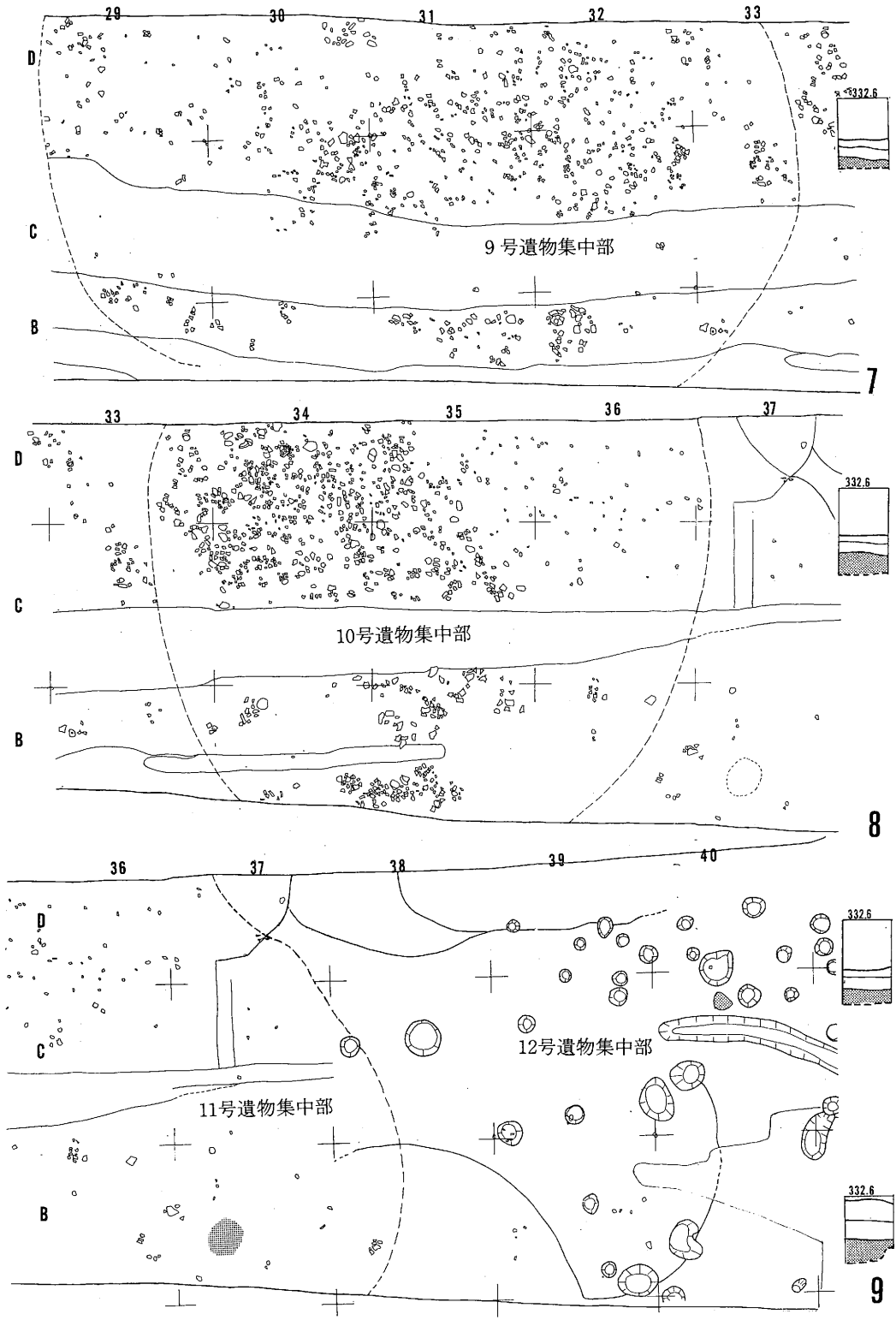
位置 16～17・D～Eグリット。



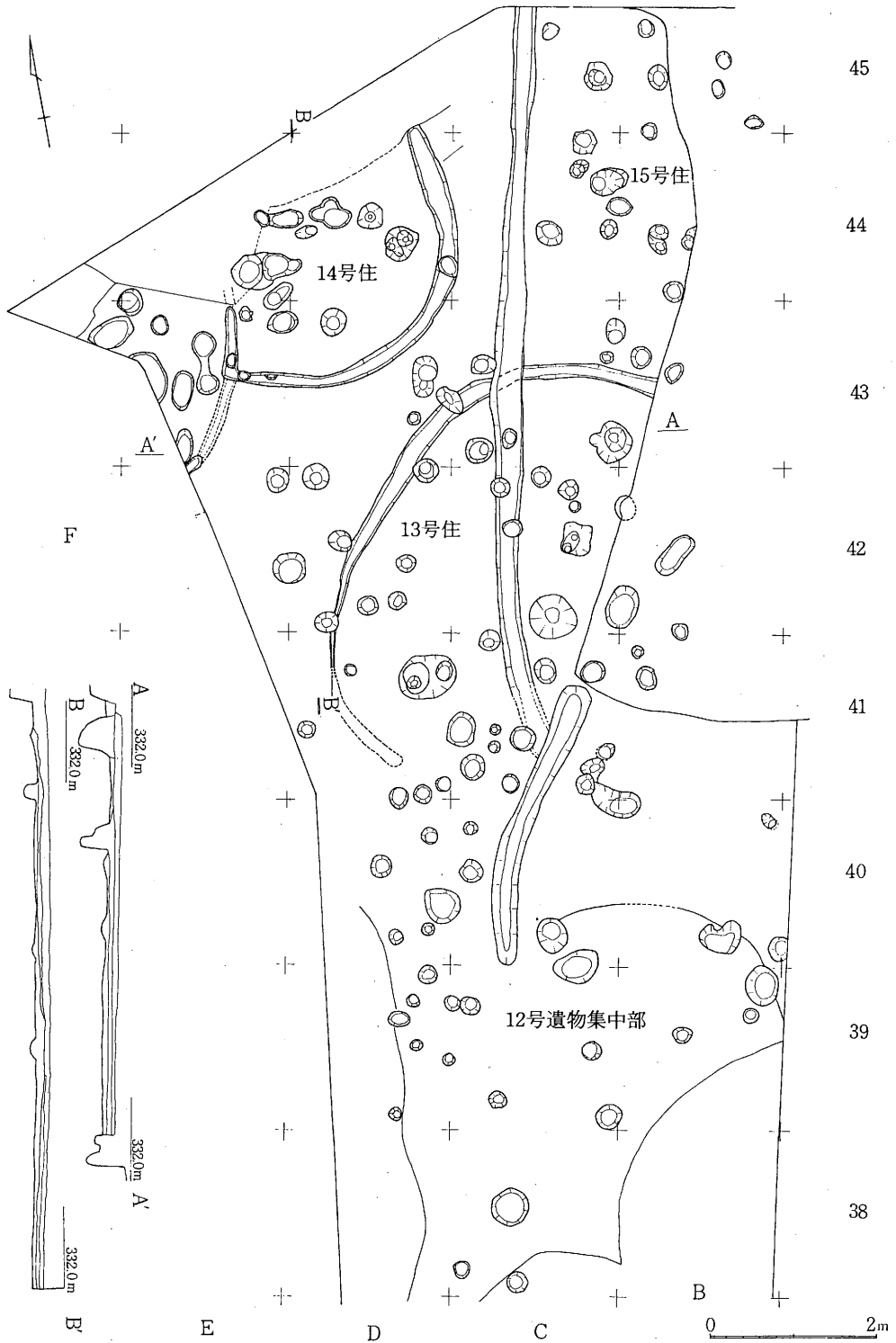
第4図 遺物集中部出土状態(1) (S=1/80)



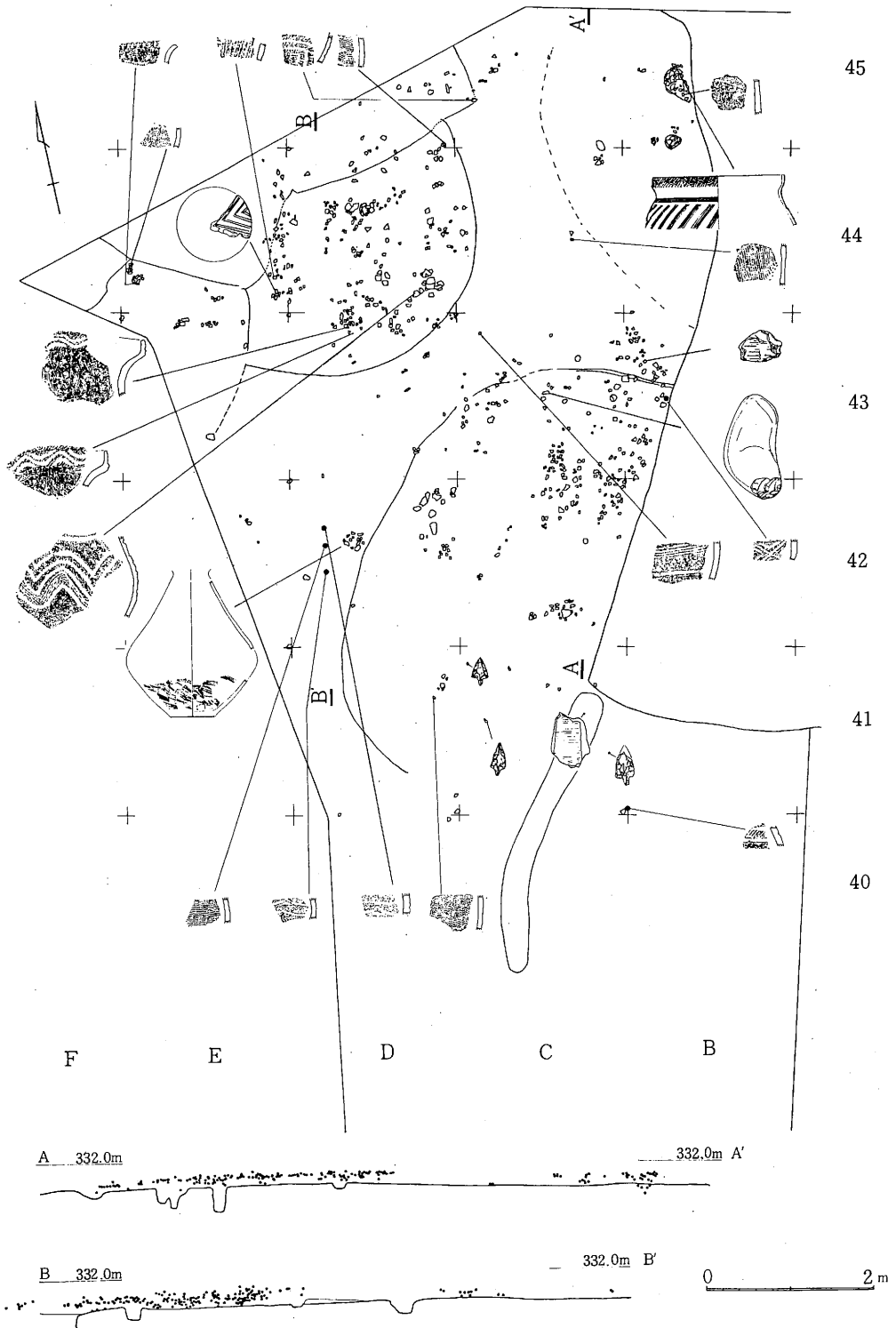
第5図 遺物集中部出土状態(2) (S=1/80)



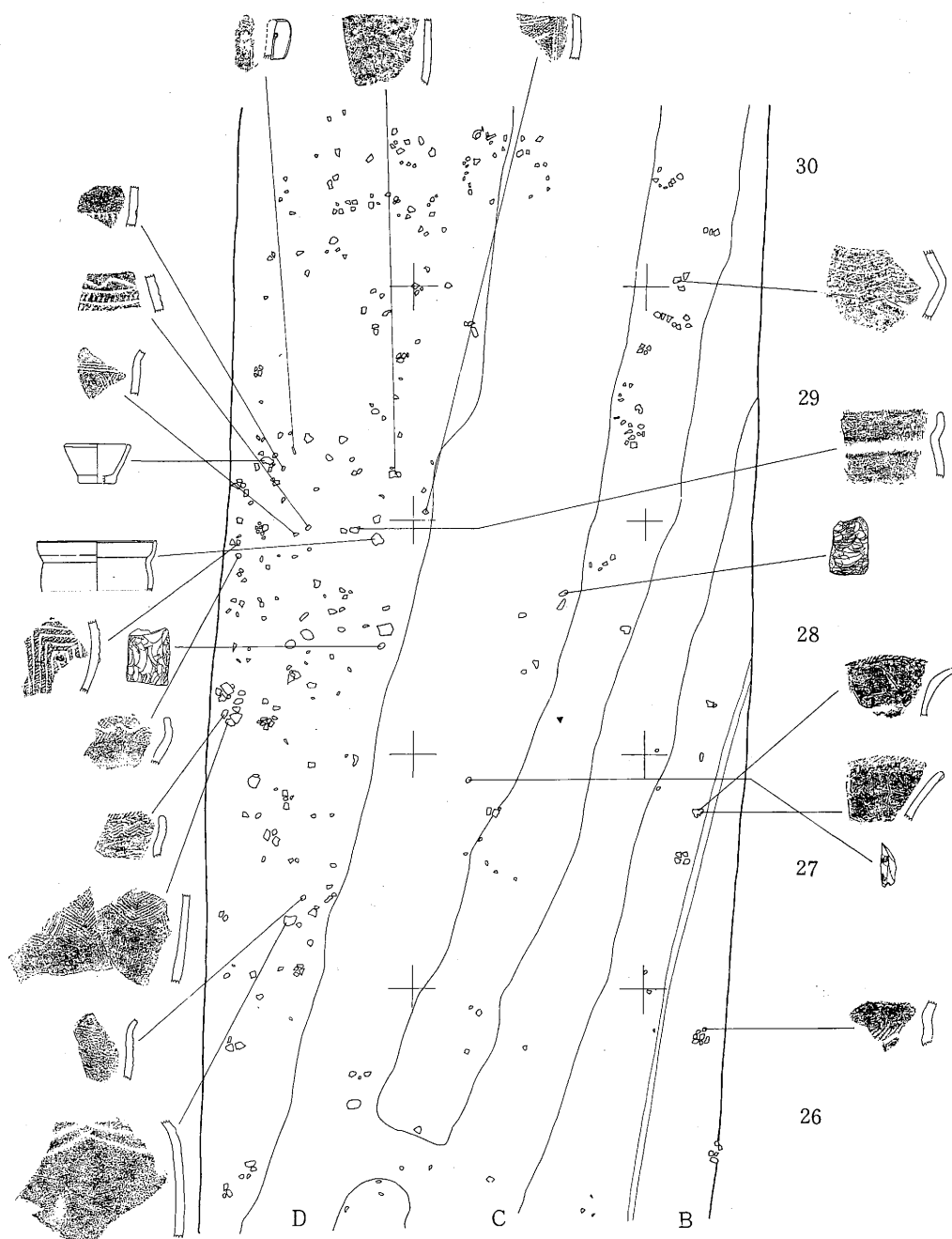
第6図 遺物集中部出土状態(3) (S=1/80)



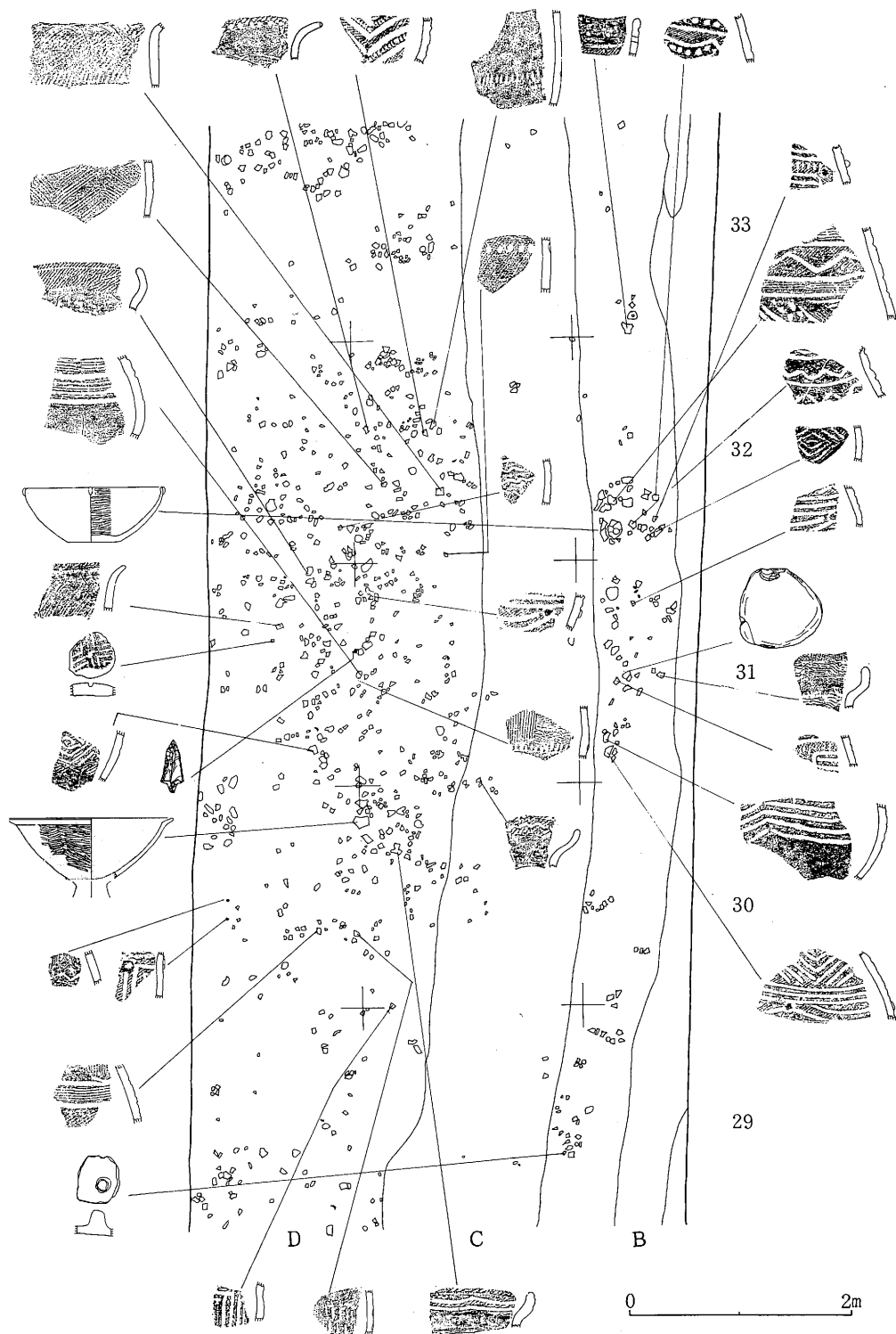
第7図 第12集中部 13号住 14号住 15号住 (S=1/80)



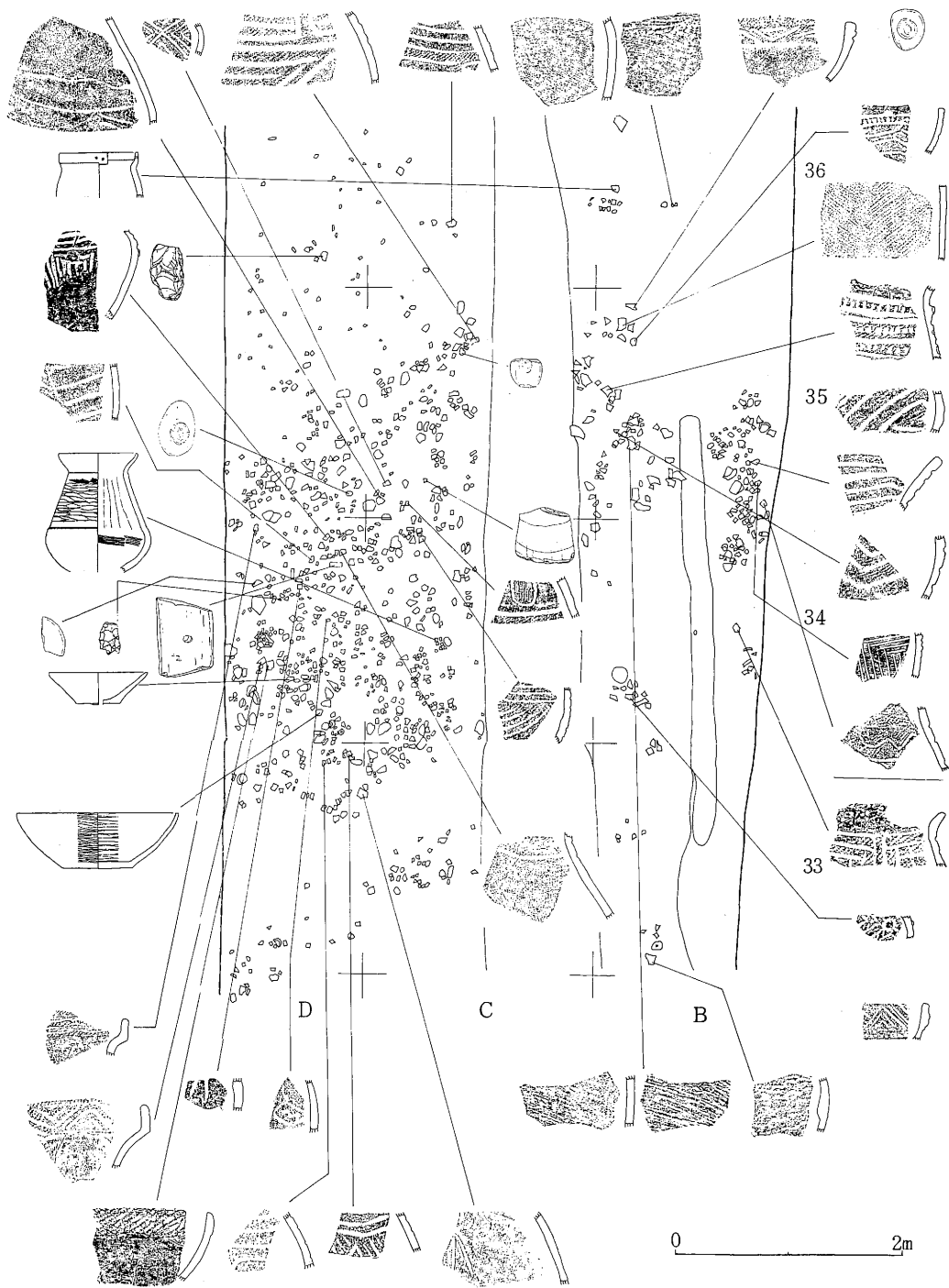
第 8 图 第13~15号住居遺物出土状态 (S=1/80)



第9図 第8遺物集中部出土状態



第10图 第9遺物集中部出土状態



第11図 第10遺物集中部出土状態

プランの確認 不明。

遺物出土状況 南北4 m×東西2.5mの半円形。

6号遺物集中部 (5図4)

位置 18～21・C～Dグリット。

プランの確認 不明。

遺物出土状況 攪乱多く不明瞭。

7号遺物集中部 (5図5)

位置 22～25グリット。

プランの確認 不明。

遺物出土状況 散在しており、明確ではない。北側部分は8号遺物集中部の一部の可能性あり。

8号遺物集中部 (5図6、9図)

位置 26～29グリット

プランの確認 不明。

遺物出土状況 南北6 m×東西5 m。9号集中部と接し、重複の可能性あり。

9号遺物集中部 (6図7、10図)

位置 29～33・C～Dグリット

プランの確認 不明。

遺物出土状況 南北7 m×東西4.5m。完形品含む。集中度高く、大形破片目立つ。

10号遺物集中部 (6図8、11図)

位置 33～36・B～Dグリット

プランの確認 不明 (遺物の分布から考慮すると9、11号遺物集中部と重複の可能性あり)。

遺物出土状況 南北6 m×東西5 m

11号遺物集中部 (6図9)

位置 36～37・B～Dグリット

プランの確認

12号遺物集中部 (6図9、7図)

位置 38～40・B～Dグリット

プランの形状 西側及び東側に一部確認。ピット確認。

遺物出土状況 削平の為少量。

(2) 竪穴住居址

13号住居址 (7・8図)

位置 41～43・C～Dグリット。

検出状況 攪乱をうけ、覆土は5～7cm。東部分及び北部分は削平されてる。径約4mの周溝、柱穴のみを検出。柱穴には切りあうものがある。炉址は確認できず。

プラン 円形。径は4m内外（周溝から推測）。

遺物出土状況 柱穴上面に集中する傾向あり。住居廃絶後の窪地に堆積したものか。

14号住居（7・8図）

位置 43～45・D～Eグリット。

検出状況 東西方向にずれた二軒の住居の切りあい。覆土の大半は削平されている（厚さ5cm）。東側住居が西側住居を切る。東側住居で径約4mの円形周溝を確認。北側が削平され、1/4のみ残存。西側住居址は一部周溝を確認したのみ。調査区西側に広がる。

プラン 東側住居、径約4mの円形（周溝から推測）。西側住居は不明。

遺物出土状況 覆土がほとんど残されていない。柱穴付近にまとまる。

15号住居（7・8図）

位置 43～45・B～Cグリット。

検出状況 削平され覆土は残されていない。住居址の西側及び北側は削平される。周壁と考えられる円形に配列された柱穴を検出。

プラン 円形で大きさ不明。

遺物出土状況 柱穴内より出土。

(3) 带状礫群（5図4）

位置 18・C～Dグリット。

形状 幅50cm、長さ250cm、厚さ5cmの帯状に小円礫を集積する。南東から北西方向に延びる。さらに北西方向に連続している可能性あり。

時期 栗林式期（礫中に栗林式土器の破片含まれる）。

2 遺物

(1) 土器

1号遺物集中部（13図1）

出土遺物は少量である。図示し得たのは13図1のみである。壺形土器の頸部破片である。

2号遺物集中部（12図1・2、13図2～18）

12図1・2はいわゆる無果実形の壺形土器である。1と2は同一個体の可能性がある。

12図1は頸部以上及び胴下半部を欠く。頸部文様は縄文の施文される幅の広い突帯とそれを

画する沈線からなる。胴部上半部は幅の広い変形工字文と櫛歯状工具による刺突文が交互に施文される横帯文様が施文される。なお、刷毛成形痕がのこる。

12図2も無果実形の壺形土器の胴下半部である。最大胴部径付近に沈線文と櫛歯状工具による刺突文がめぐり、その下位には三本の沈線による連弧文が施文される。底部近くには縦方向の篋ミガキが認められる。

13図2～13は壺形土器の破片。4は胴部上半部の破片で変形工字文が施文される。10も胴部上半部の破片で、二本の沈線に挟まれた横走する櫛描直線文と上下三列の半月形刺突文が交互に施文される。3、11から13は胴部下半部の破片であり、いずれも連弧文が施文されている。

13図15から18は甕形土器の破片。15は口唇部に押圧文が見られ、横走する羽状文が施文されているものと思われる。16はいわゆるコの字重文の施文される台付甕の破片であろう。

3号遺物集中部 (13図19～22)

13図19は壺形土器の胴状半部、頸部に上下に沈線を配し、縄文を地文に沈線による波状文が施文された突帯がめぐる。20は壺形土器の胴下半部の破片。重三角文が施文される。21も連弧文の施文された胴下半部の破片。22は甕形土器の胴部破片。櫛状工具による波状文が施文される。

4号遺物集中部 (13図23～33)

13図23、24は壺形土器の口縁部。13図25～26、29は壺形土器胴上半部の破片。横走する櫛描直線文と半月刺突文が交互に施文される。27、28、は壺形土器胴下半部の破片。27は重三角文の隙間に半月形刺突文が充填される。28は文様構成が不明であるが、瘤状突起が施文される。13図31～33は甕形土器の胴部破片。32、33は甕形土器胴部中程にめぐる刺突文。

5号遺物集中部 (13図34～38、14図1～16)

13図34から38、14図1から7は壺形土器の破片。14図8～16は壺形土器の破片。13図34は受口状を呈する壺形土器の口縁部。口縁部の段は明瞭ではない。縄文を地文に重山形文が施文される。13図35は刻目のある突帯文が施文される壺形土器頸部破片。36、37は縄文を地文に沈線文が施文された壺形土器胴部破片。13図38は重山形文の施文される壺形土器の胴下半部破片。14図1は重三角文の施文される胴下半部破片。14図2は横走する沈線文と沈線文の間に斜めの直線文が施文される胴状半部の破片。3、6、7は横走する沈線文が施文される胴上半部破片。4は細い沈線で三角形を描き、底に三角形の刺突文が充填されている。

14図8～16は甕形土器の破片。14図9～11はコの字重文の施文される台付甕の破片。

6号遺物集中部 (14図17～33)

壺 (14図17-20)、甕 (14図31-33)、鉢、甑の破片が出土している。

14図18は壺頸部破片、14図17、9～30は壺胴部破片である。14図22、23、26、30は頸部から胴部下半まで文様が施文される。14図28は地文に櫛描文を横位に巡らし、沈線文で矢印を施文したものである。

31はコ字重ね文の台付き甕形土器の破片、32、33は櫛描羽状文を施文したものである。

7号遺物集中部（14図34から41）

当集中部は壺（14図34・37・39）、甕（14図38・39・41）、鉢、小形壺の破片が出土している。

34は受け口口縁の破片である。縄文の地文上に沈線による波状文が施文されている。35は頸部破片、36は頸部下半部に沈線で囲まれた下垂する櫛描文の施文された壺形土器である。39は連弧文の施文された胴下半部の破片。

38・40・41は櫛描文の胴部甕形土器で、横位、縦位、波状にそれぞれ施文されている。

8号遺物集中部（12図8・12・16、14図42～46、15図1から42）

8号遺物集中部には、壺（12図8、14図42～44、46、15図1～15）、甕（14図45、15図17～42）、鉢（15図16）、高杯、甑（12図12）、蓋（12図16）の破片が出土している。

第14図42・43は朝顔状の細頸壺の口縁。44・46は段の明瞭でない受け口状の口縁の破片。第15図1は耳状突起のある壺形土器の口縁部破片である。2は受け口状の口縁部の破片。

第12図8は内外面研磨された、受け口状の口縁を持つ小形短頸壺と思われる。

第12図12は小形甑である。

第12図16は蓋形土器と思われる破片である。中央部に未穿孔の穴が明いている。

第15図16は鉢の折り返し口縁部の破片である。第12図10はやや内湾する内外赤彩している鉢である。

第15図17は受け口状口縁の甕の破片である。

18・19は垂直に立ち上がる甕の口縁部破片、20～24はやや開く口縁部の甕破片である。25はコの字重ねの甕胴部破片、26～42は櫛描文の甕胴部破片。羽状や波状文、櫛描き直線文の組み合わせなど、多様な文様が施文される。33・34のように縄文の地文の上に直線櫛描文を施文してあるものもある。41・42は胴下部に半月形刺突文が巡っているものもある。41は段を設けた後に半月形刺突文を施文している。36は頸部がくの字状に屈曲する。

9号遺物集中部（第12図9・11、第15図43～45、第16図1～42、第17図1～33）

当集中部では、壺形土器（15図43から45、16図1～41、17図1～5）、甕（17図6、8～31）、鉢（12図11、17図33）、高杯（12図9）、器形のわからないもの（17図32）等が出土している。第9集中部付近で蓋形土器（17図15）が出土している。

15図43は朝顔形口縁部、17図1～5は受け口状の口縁の壺形土器の破片である。17図1・2は段の明瞭な口縁であり、1の段の下には穿孔の小さな穴があげられている。3～5は段が明瞭でない。

壺頸部―胴部上半部文様としては、沈線と半月形刺突文が横帯に巡るタイプ（15図44、16図17）、縄文を地文とし平行沈線紋が巡るタイプ（16図3・4・18・19）、その沈線の間刻みの施文されるタイプ（15図45、16図11・12、14～16）、沈線で囲まれた櫛描文や縄文が頸部下半部に懸垂するタイプ（16図6～9）、沈線で描いた波状文と直線文を交互に横位に巡らせた

タイプ(16図5)、平行沈線紋の間に櫛描直線文を巡らせたタイプ(16図20~23)がある。

壺胴部文様としては、胴上部は平行に文様が巡り下部に山形に区画した文様(16図24、25)や、胴下半部に施文した重弧文様(29~35)、重山形文(36・38・39)、重菱形文様(40・41)等がある。

12図6は受け口状の口縁で、胴下半部に有段部がありその部分下が最大径になる下膨れの短頸壺である。無文で外面は磨き、内面櫛状工具による整形を行っている

甕形土器は次のような破片が出土している。17図8は口縁下に二つの穿孔が認められる。17図9~13はやや開いた口縁である。17図14・15はコの字重文、17図23が波状沈線文、17図16~20は胴部全体に縄文が施文され、その胴部下部に半月形刺突文が施文されている。17図21は羽状の櫛描文、17図22はやや太めの櫛状工具で斜めに櫛描文を施文したものである。17図26・29は櫛描文と櫛歯刺突文を施文している。27は櫛描文の上に、内部に布状圧痕を残す刺突文が施文されている。17図30・31は胴下半部と底部の接合部に段を設けて、その段上に半月形刺突文を施文している。

17図32は器壁が薄い個体で、小形の土器と思われるが器形は不明である。横位方向に施文された沈線文の下位に半月形刺突文が二条見られる。

12図11はやや内湾する鉢形土器である。内外面ともに赤色塗彩される。口縁部に四ヶ所楕円形の小突起が付設している。17図33は折り返し口縁をもつ鉢である。

12図9は高杯上半部である。内外ともに赤色塗彩される。

10号遺物集中部(第12図6・7・13、第17図34~45、第18図、第19図、第20図)

第10集中部では、壺(第12図6・7、第17図34~45、第18図、第19図1~30・33~36)、甕(第19図31・32・40、第20図2~49)、鉢(第19図38・39、第20図1)、甑(第12図13)が出土している。

壺形土器の口縁は、朝顔状に開く口縁(17図34・35)と受け口状口縁(19図33~36)がみられる。17図35は沈線文を横位に巡らし、その下部に連弧状の様な沈線文を巡らしている。

頸部文様には、突帯が巡るもの(17図36・37)、横位方向の沈線文や沈線による波状文などが巡るものが多い。17図9は頸部と胴下半部に文様が集約されるタイプである。同様なものは18図11・13・18・22をあげることができる。18図28~31は沈線文で囲まれた櫛描文が頸部から懸垂するタイプである。

胴部上半部に重山形文がみられるタイプ(18図13~17・19・21)、縄文を地文にした平行沈線文が頸部から数条続くタイプ(18図32~37)、擦り消した地文に数条の平行沈線を施文するタイプ(19図7~10)、頸部の平行沈線文の下に連弧文の続くタイプ(19図3~5)、平行沈線文と変形工字文を施文するタイプ(19図6・9)がみられる。胴部上半部に変形工字文を太めの工具で施文し、その下部に太めの沈線で三角に区画した文様が見られるものもある(19図26・27)。

そのほか胴部に19図16のように交差した沈線文の間に重山形文を施文したもの、縦に沈線文を引きその両脇に斜めの間隔の明いた平行沈線文を施文したもの等がある(19図24・25)。

また胴部に矢印の一部のような線刻を施文したタイプ(19図28・29)、線刻の全体像がはっきりしないものもある(19図30)。

胴下半部の文様としては、重弧文様が施文してあるものがある(19図14・15、19～22)。

12図7は無文の短頸壺である。口縁下に二個の穿孔がみられる。

鉢の口縁部としては、折り返し口縁のもの(19図38)と、口縁下に連弧文の施文される破片がみられる(19図39)。

12図13は小形の甗である。

19図37、20図2は甗の口縁部である。重山形文が施文されている。20図3～5は胴部破片である。20図7～12はコノ字重文の施文される台付瓶の破片である。20図13～34は甗の胴部の破片である。20図35は太く間隔のあいた櫛状工具波状文を施文している。内面の接合面に段を設けたよう出張り面がみられる。

20図43・44は内外面に条痕文が施文されている。43は太めの間隔のあいた工具でやや斜め方向に条痕を施文している。44は刷毛状工具による施文と思われる。

20図46～49は縄文が施文されている。48・49は胴下部に半月形刺突文が一条施文され、49は段上の膨らみの上に施文している。

19図40は頸部に微隆起文が三条横位方向に施文されている。器壁も薄く小形の甗の破片と思われる。

11号遺物集中部(第21図1～26)

第11集中部では、壺(21図1～14)、甗(21図15～23)が出土している。

21図13・14は壺の受け口状口縁部の破片、あまり段が明瞭ではない。21図1～5は壺頸部破片である。21図8・9は胴部下半部の破片、沈線文で三角に区画された文様がみられる。21図11・12は胴部下半部の破片、重連弧文がみられる。

21図15・16は甗の頸部破片と思われる。16には円形の小突起がみられる。21図17～22は甗の胴部破片である。21図23は口縁部が波状口縁になっている。

21図24～26は第11集中部と第12集中部の間で出土したものである。壺胴部の破片と思われる。

12号遺物集中部(第21図27)

第12集中部は遺物量が少なく、壺頸部破片が多い(第21図27)。

13号住居址(第12図5、第21図28～35)

当住居址では、壺の破片(21図28～31)、短頸壺(12図5)、甗(21図32～35)出土している。

21図28は交差する沈線文の区画内に山形文が施文されている。21図30・31は胴部下半部の連弧文である。

21図32～35は櫛状工具による文様の甗胴部破片である。

第13住居址のプランの西側より、第12図4の細頸壺形土器が出土している。口縁部から頸部にかけては欠損している。櫛状工具による地文の上に矢印のような線刻記号を施文した胴部破片が出土している。胴部全体には表裏とも櫛状工具による条痕の地文が施文されている。

14号住居址（12図14、21図36～50）

14号住居址では壺（21図36-50、22図1-10）、甕（22図11-23）、蓋（12図14）が出土している。

21図36は壺の朝顔状に開いた口縁部、22図9・10は受け口状の壺形土器の口縁部である。壺頸部から胴部上半部は21図37-50、22図1-2の破片である。21図43・44・45・47・48は櫛歯刺突文を施文している。

22図3-8は壺胴部破片である。4は胴部に波状の大きな文様を櫛描文と沈線で施文している。

甕形土器の口縁は22図11-13である。11は受け口状の口縁である。12は波状口縁である。

14はコの字重ねの文様の一部ではないかと思われる。円形の小突起が施文されている。15はコの字重ねの文様である。

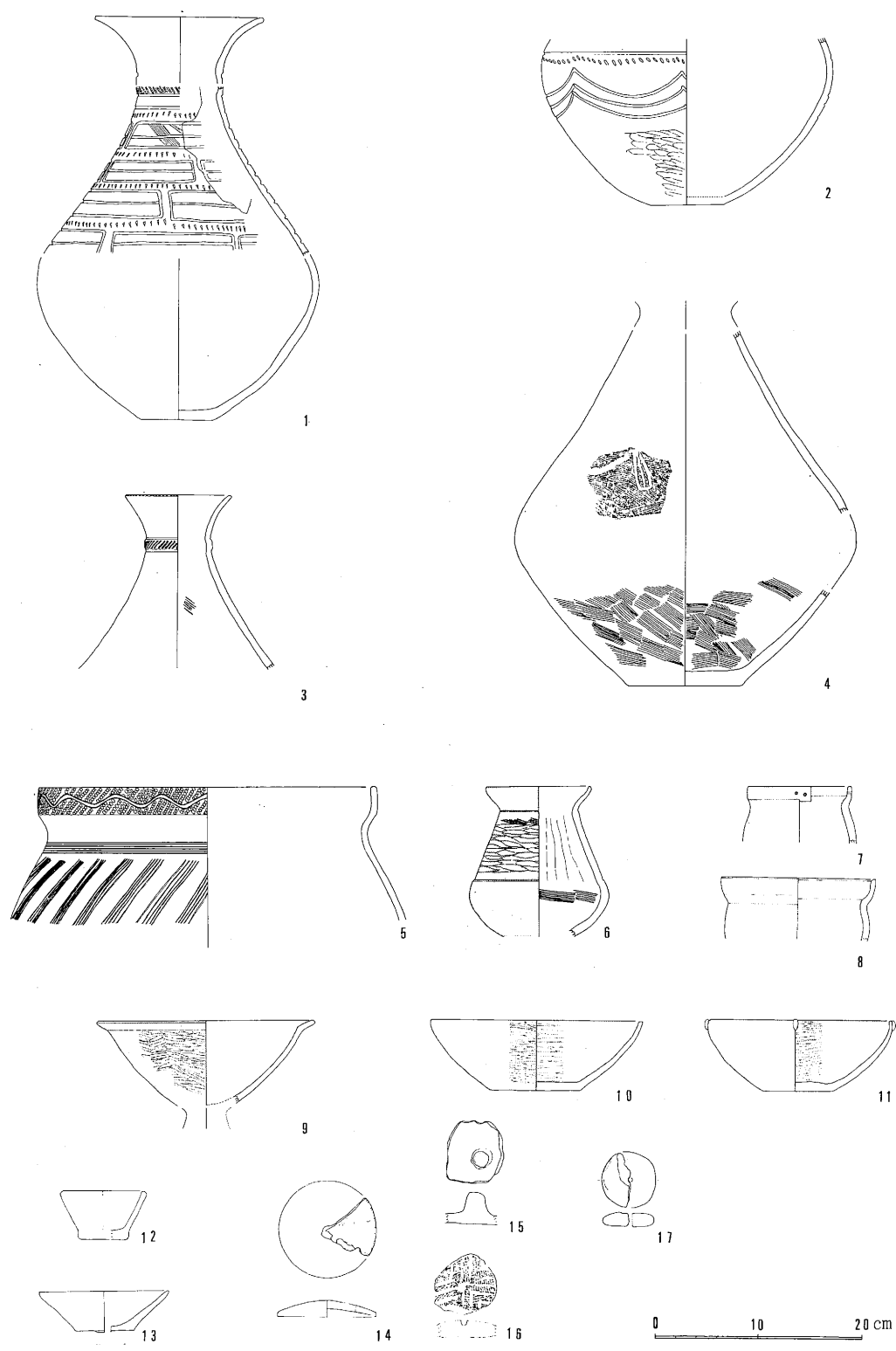
22図16-23は櫛状工具による文様である。23は段の上に半月形刺突文を巡らせている。

12図14は蓋である。表面には沈線で重山形文が施文されている。一ヶ所穿孔穴があげられている。

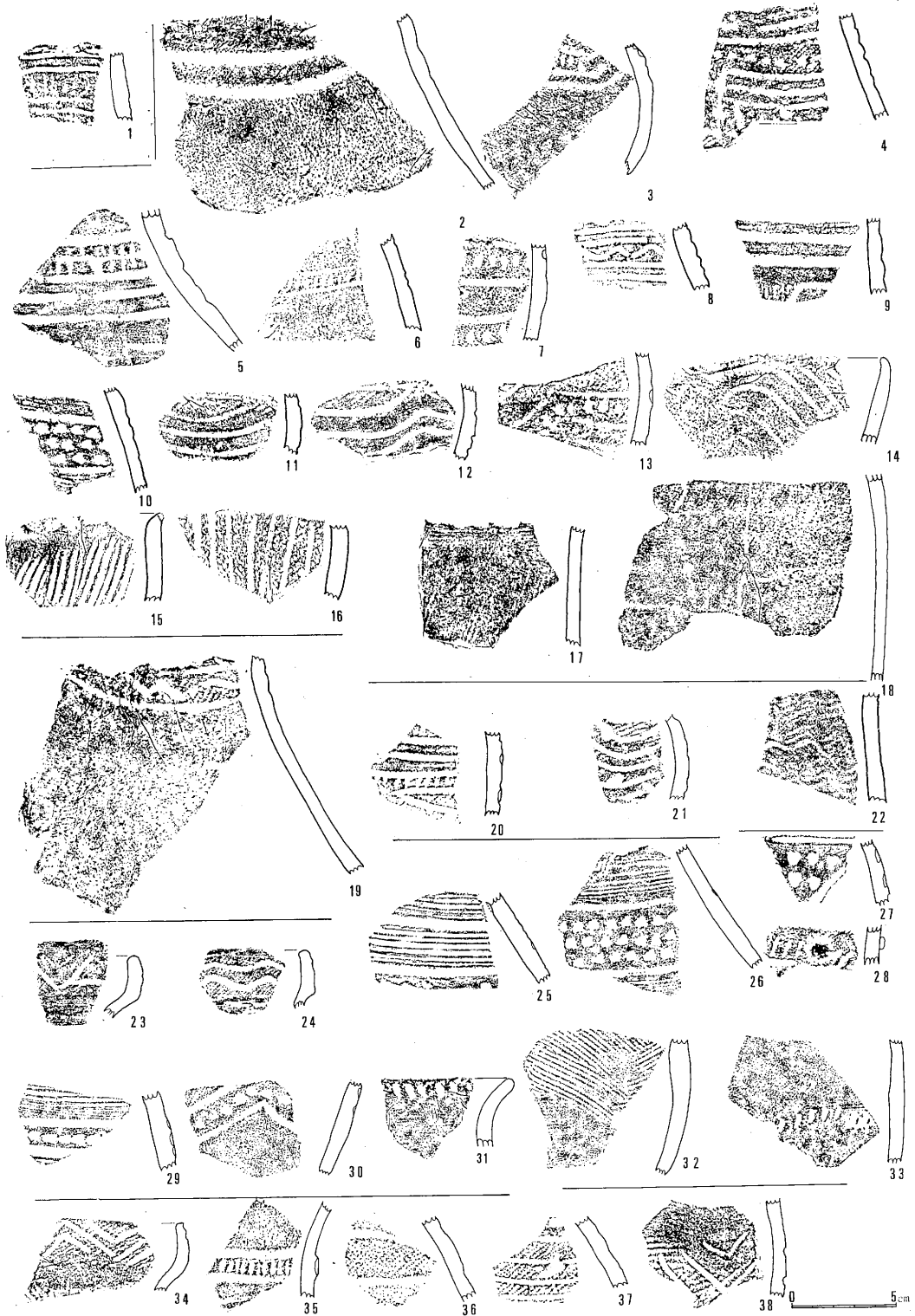
15号住居址（12図5、22図24～27）

12図5は受け口状口縁の甕形土器である。口縁部の有段部に縄文を施文し、沈線で波状文を一条めぐらせている。頸部に櫛描直線文をめぐらし、胴部に横走る櫛描羽状文を施文する。柱穴から出土した。

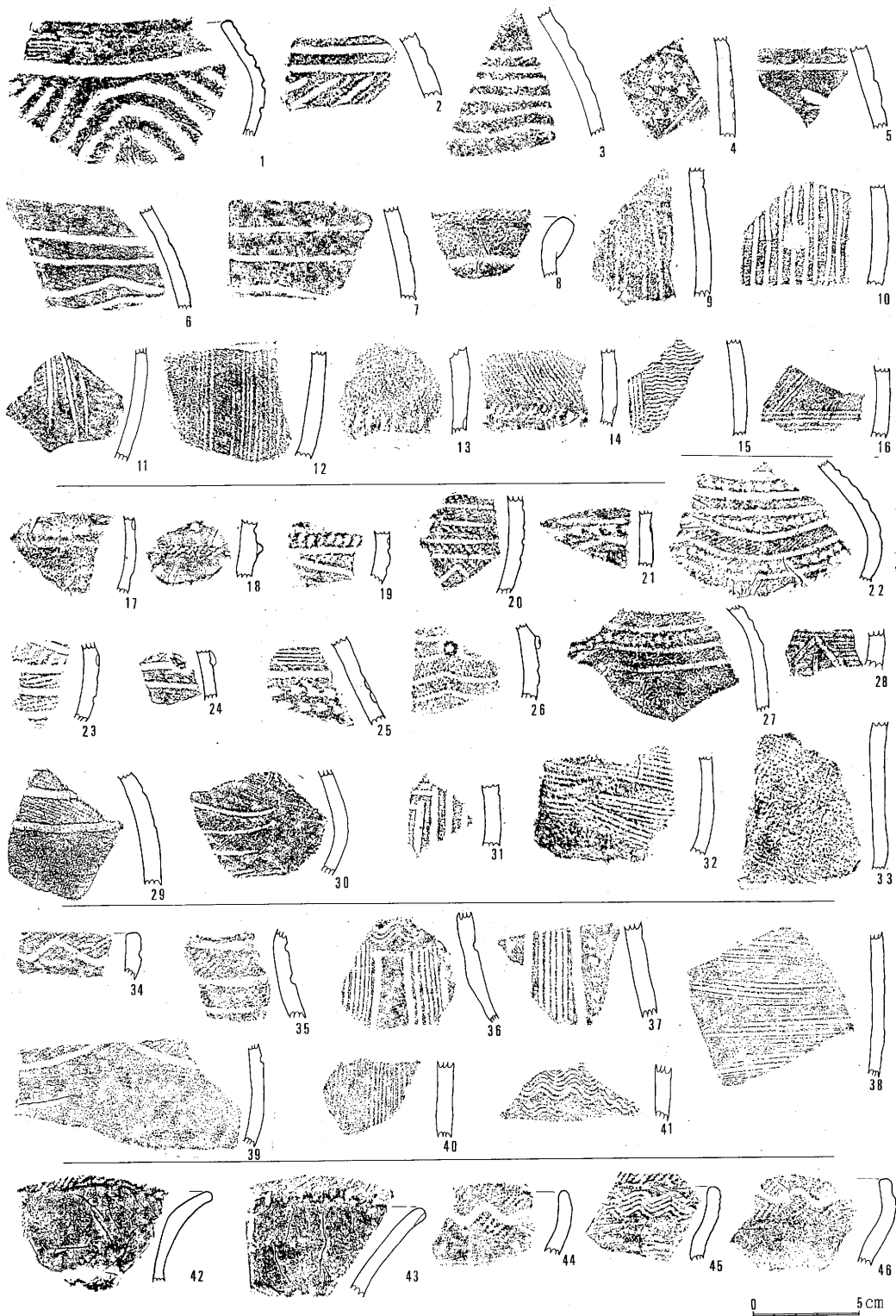
22図25、27は壺形土器、27には矢印状の線刻文が施文される。22図24、25は甕形土器の破片である。



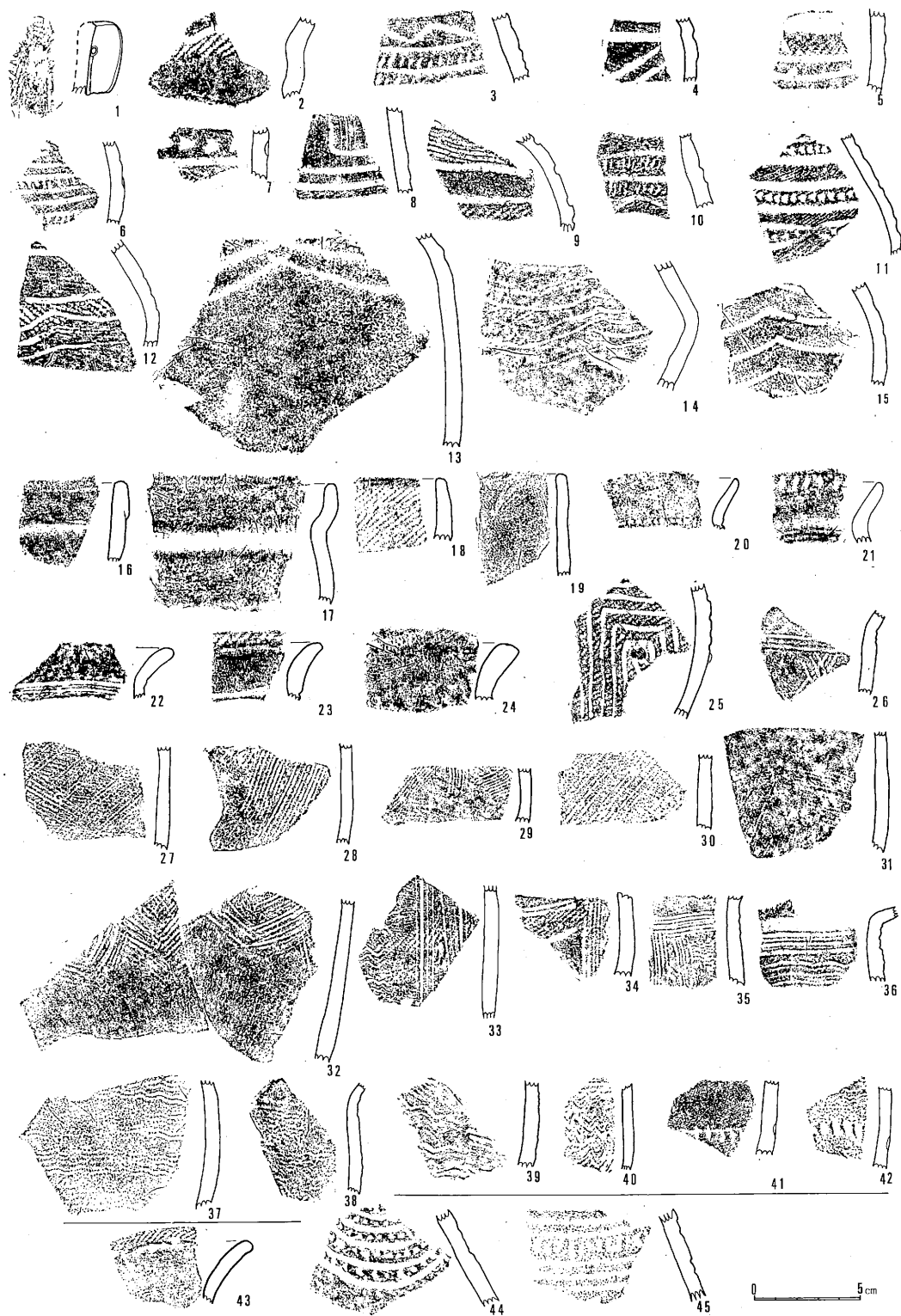
第12図 土器・土製品実測図 S=1/60



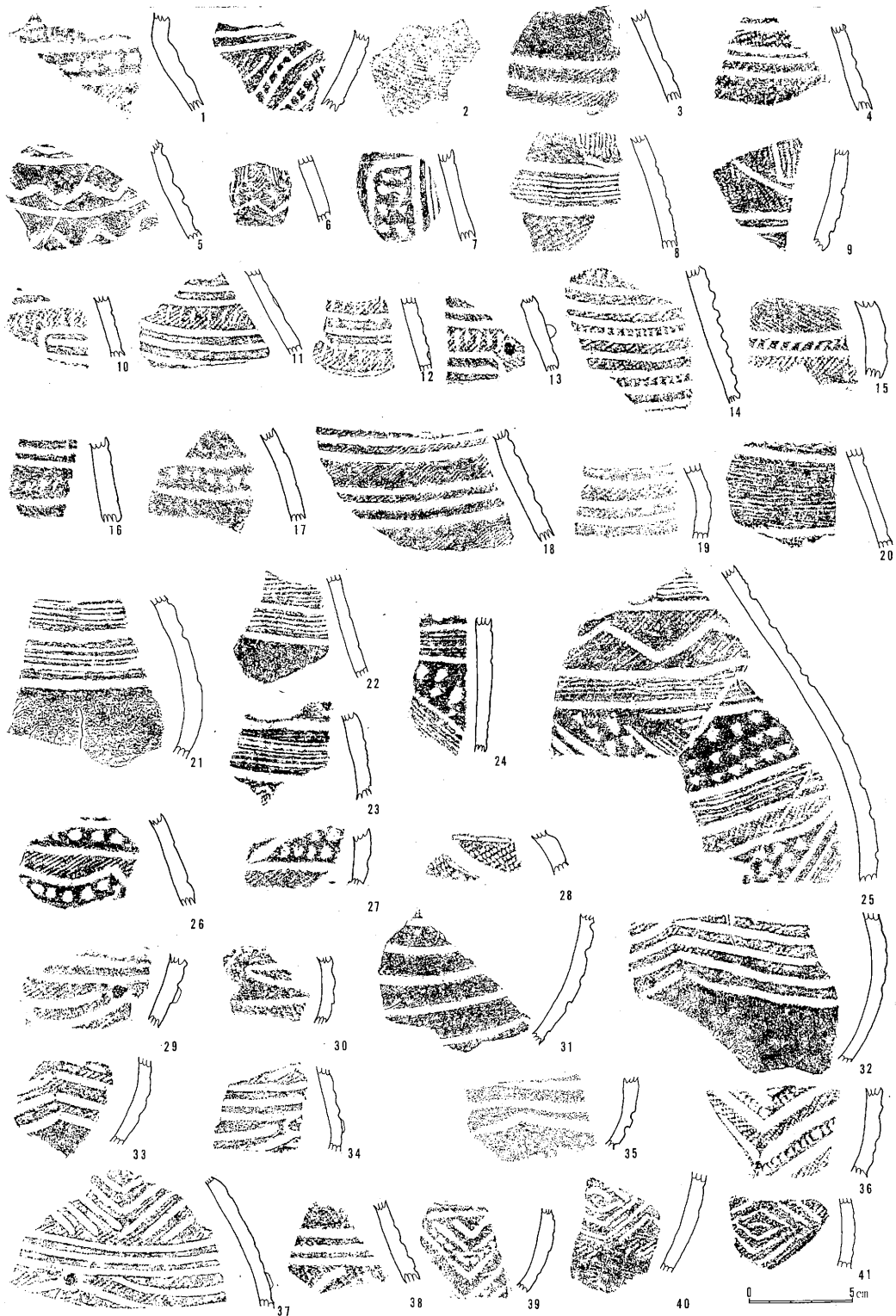
第13图 第1~5遺物集中部出土土器拓影



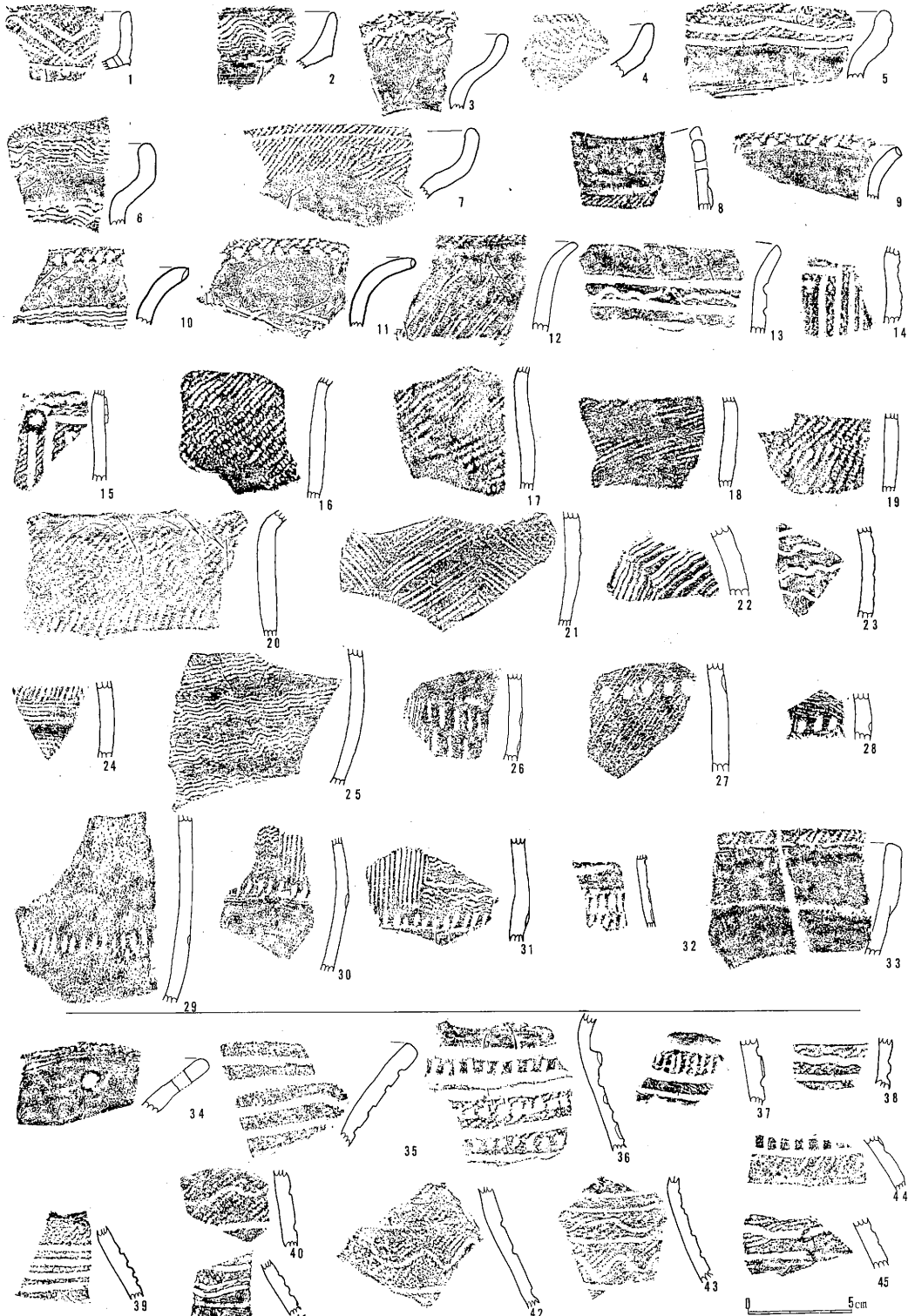
第14図 第5～8遺物集中部出土土器拓影



第15图 第8、9遺物集中部出土土器拓影



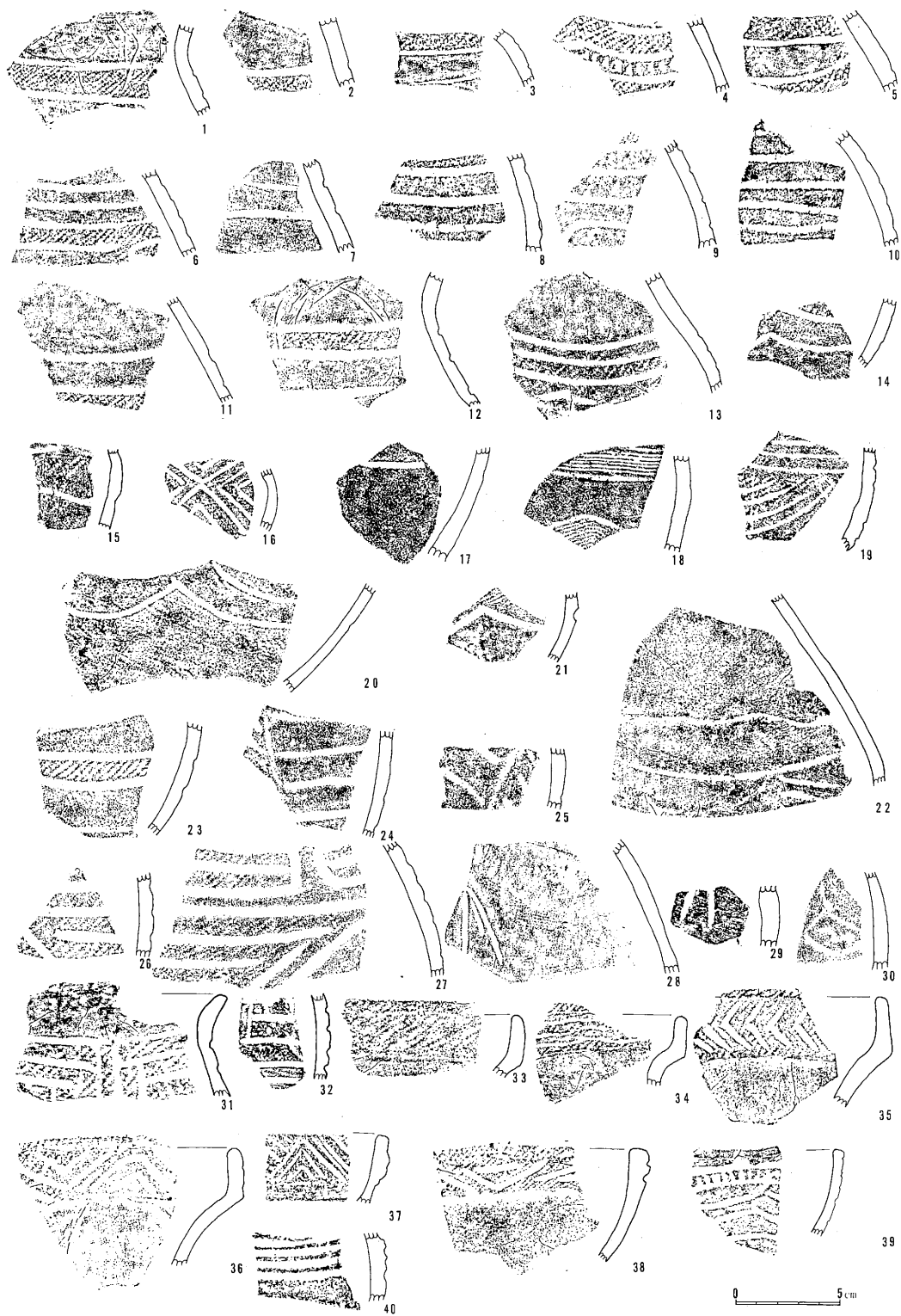
第16图 第9遺物集中部出土土器拓影



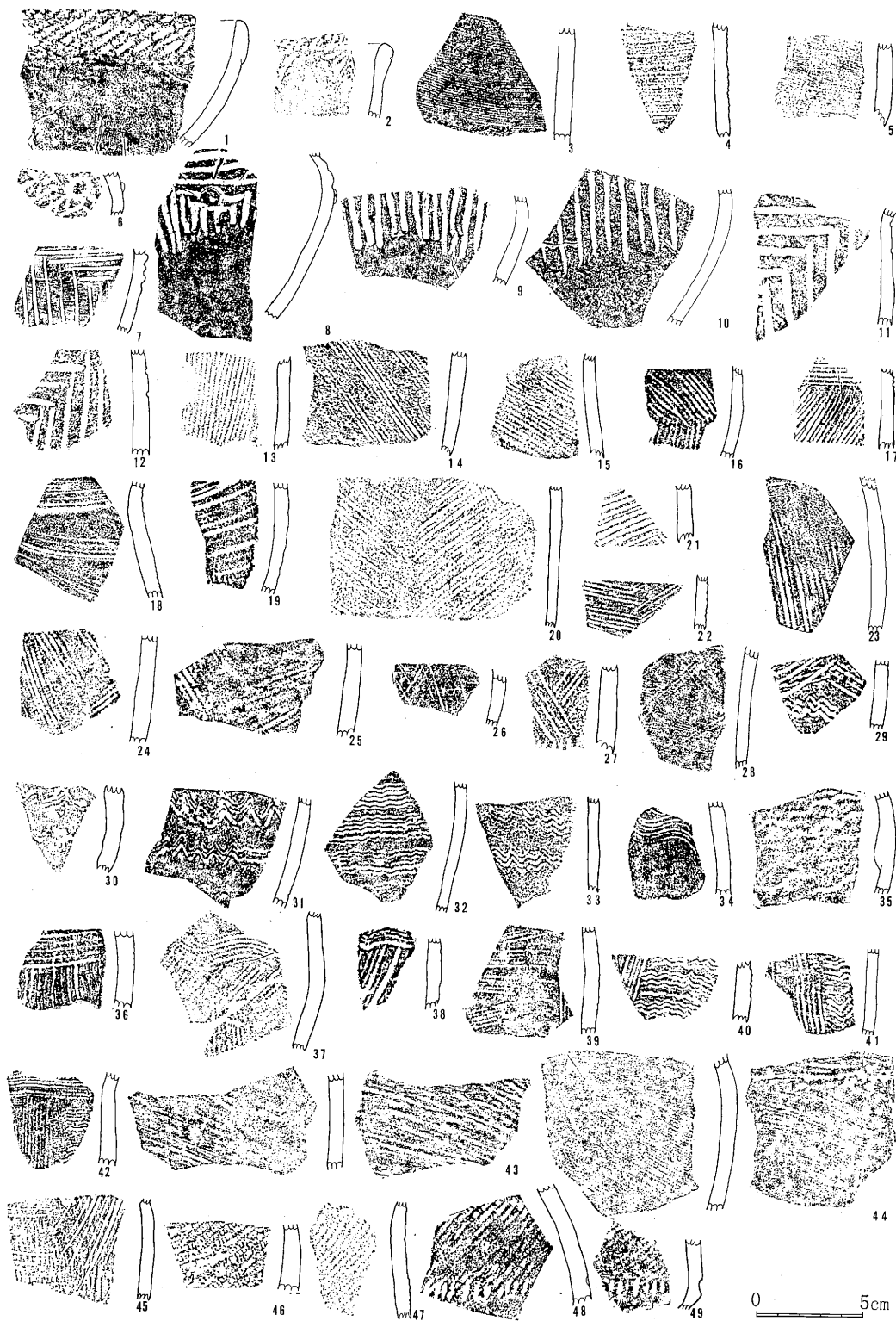
第17图 第9、10遺物集中部出土土器拓影



第18图 第10遺物集中部出土土器拓影



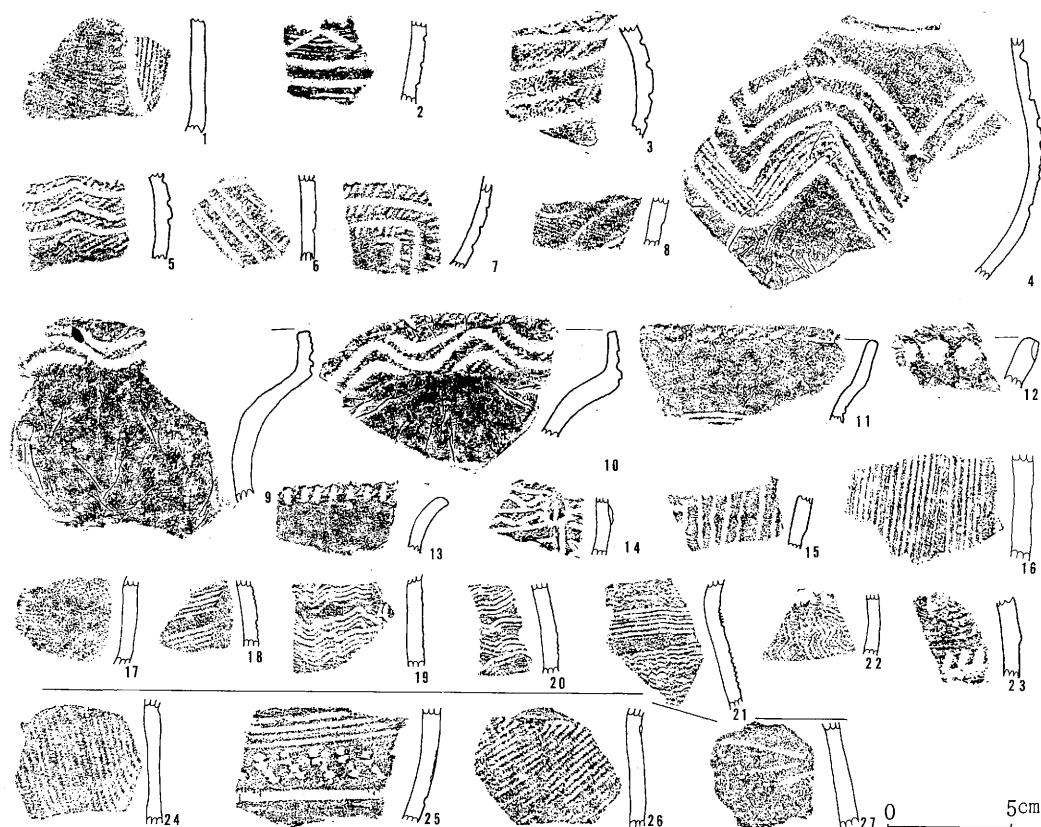
第19图 第10遺物集中部出土土器拓影



第20图 第10遺物集中部出土土器拓影



第21图 第10~12遺物集中部、第13~14号住出土土器拓影



第22図 第14、15号住出土土器拓影

図版番号	グリッド	遺構	No.	器種	口径	高さ	底径	備考
12-1		2	34	細頸壺	15.3	21.7	7.0	
12-2		2	34	細頸壺		15.2	6.5	壺胴下半部底部なし
12-3		2	32	細頸壺	9.5	16.0		磨き整形痕不明
12-4	42D		2	細頸壺		10.4	10.4	
12-5		13		短頸壺	30.4	12.3		
12-6		10	5	短頸壺	9.4	14.2	6.4	
12-6		10	10	短頸壺				
12-7	36D	10		有孔小形甕	9.4	5.3		
12-8		8	13	小形甕	13.6	5.7		
12-9		9	7	高杯	19.4	8.0		
12-10		8		鉢	19.4	6.5		内外赤彩
12-11		9	48	鉢	16.3	6.6		内外赤彩
12-12		8	21	小鉢	7.3	4.5	4.0	
12-13		10	9	甑	11.7	3.6	5.5	
12-14		14	1	蓋	9.0	1.5		穿孔有り
12-15	29B		1	つまみ付蓋	5.7	1.0		
12-16		8	13	蓋	5.7	1.5		中央部に凹み有り
12-17	33-36CD	9	10	紡錘車	4.9	0.8		

第1表 出土土器・土製品計測表 (単位 cm)

(2) 石器・石製品 (第23図、第24図、第25図)

栗林遺跡の今回の調査では、主な石器として、打製石鏃6点、磨製石鏃1点、磨製石斧4点(転用のものも1点含む)、磨製石製品1点、打製石斧2点、石錘2点、スクレイパー6点、敲打石2点、凹石4点、石皿1点、フレーク等である。

A 石鏃(第23図1-7)

石鏃は打製のものと磨製のものが出土した。

打製石鏃はすべて、有茎石鏃であった。1は表採、2・3・6は13号住の付近、4は第9集中部、6は第10集中部より出土した。

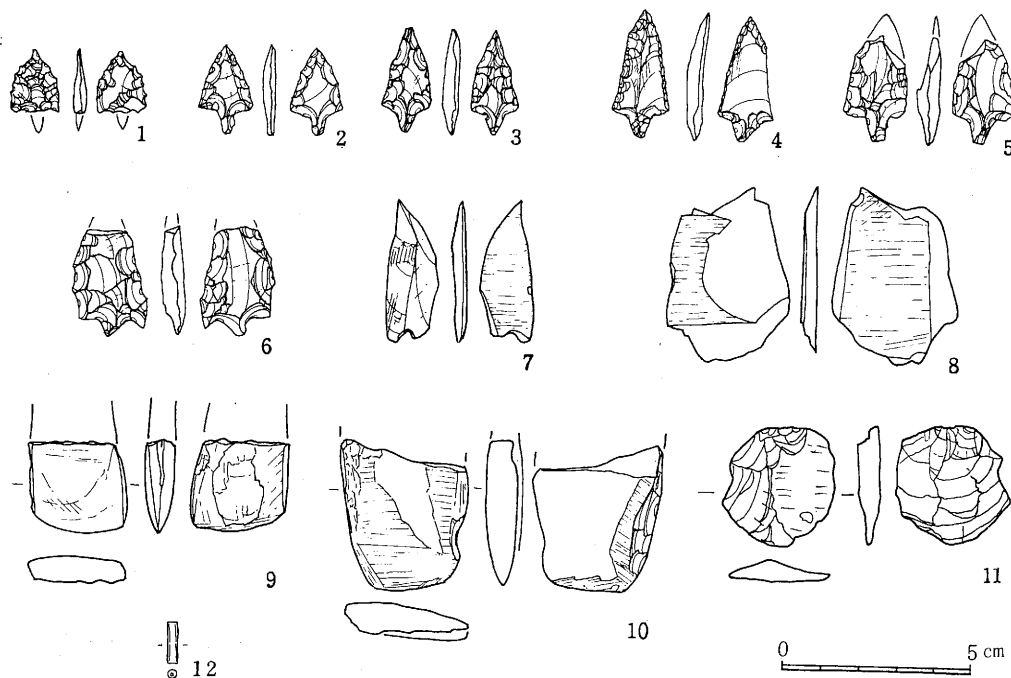
1は基部が欠損している。5と6は先端部が欠損している。

1は先端部がややくびれていて、小型である。黒曜石製。2も形が整ってはいるが小型である。安山岩製。3と4は細身のものである。3は安山岩製と思われる。4は頁岩製。5と6はやや幅広で大型である。6はやや未製品のように不定形である。5と6は安山岩製。

7は裏面が磨かれた頁岩製の磨製石鏃である。表面は剝片の剝離面を残している。基部は扶りを加え、返しを設けている。

B 磨製石製品(第23図8)

8は表裏に磨きを加えて薄くした粘板岩製の製品である。13号住付近より出土した。欠損部



第23図 石器 (1)



第24図 石器 (2)

が多く器種は不明。

C 磨製石斧 (第23図9・10、第24図1・2)

磨製石斧は、小型のものと大型のものが2点ずつ出土した。

23図9は、蛇紋岩製で基部が欠損している。第7集中部より出土したものである。やや定角形である。

23図10は、第5集中部より出土した。基部が欠損しており、裏面の表面が剥がれている部分がある小型のものである。安山岩製

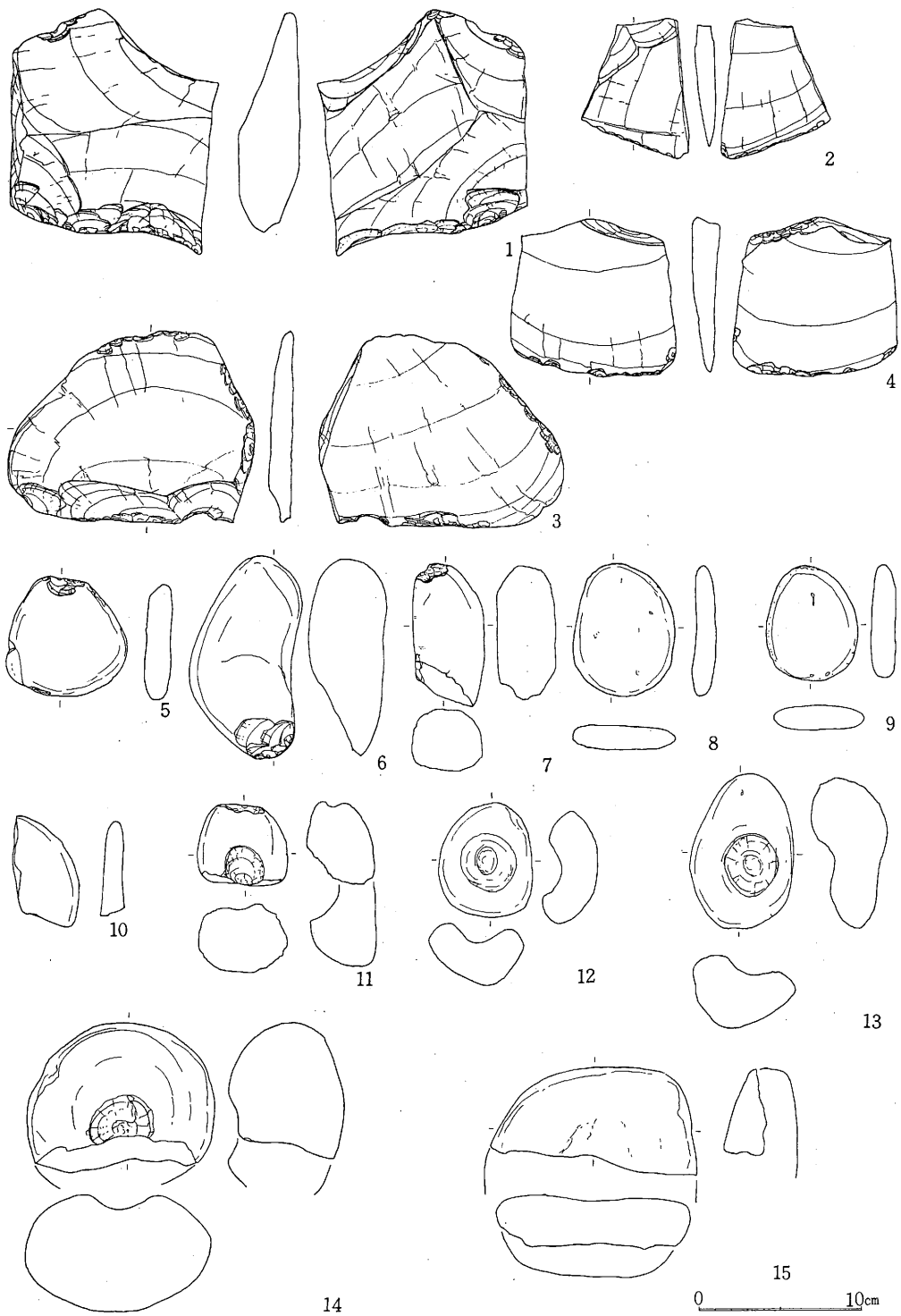
24図1は磨製石斧の胴上部破片である。蛇紋岩製で、胴部断面はやや円みを持っている。第5集中部より出土。

24図2は磨製石斧の胴下部である。蛇紋岩製。基部が欠損した断面を砥石のように利用したと思われ、欠損部断面が平らに磨かれている。第10集中部より出土。

D 打製石斧 (第24図3、4)

24図3は、基部と刃部を欠損している胴部のみの打製石斧である。胴部側縁は平行であり、裏面は横剥ぎの主要剥離面の側縁部のみを加工して形を整えている。第8集中部出土で砂岩製である。

24図4は、基部を欠損している打製石斧と思われる石器である。形態はやや不定形。第10集



第25图 石器 (3)

図番	グリッド	遺構	No.	器種名	石材	長	巾	厚	備考	
23	1	不明		有茎石鏃	黒曜石	1.7	1.3	0.4	基部欠損	
23	2	41CD	13	有茎石鏃	安山岩	2.4	1.4	0.3		
23	3	41C	2	有茎石鏃	安山岩?	2.8	1.3	0.5		
23	4		9	17 有茎石鏃	頁岩	3.4	1.5	0.5		
23	5	41C	P24		有茎石鏃	安山岩	2.9	1.6	0.6	先端欠損
23	6		10	11 有茎石鏃	安山岩	2.9	2.0	0.6	先端欠損	
23	7		8	16 磨製石斧	頁岩	3.7	1.5	0.4		
23	8	41C	13		磨製石製品	粘板岩	4.8	3.3	0.4	欠落部が多い
23	9		7	17 磨製石斧	蛇紋岩	2.3	2.6	0.8	刃部のみ	
23	10		5	4 磨製石斧	安山岩	4.0	3.4	1.0	刃部のみ、裏面欠落	
23	11		4	12 フレーク	チャート	3.1	2.9	0.6	磨製石斧のフレーク	
24	1		5	7 磨製石斧	蛇紋岩	5.0	4.9	3.7	胴部破片	
24	2		10	17 磨製石斧	蛇紋岩	10.1	7.8	4.7	胴部、折面を研石に再利用	
24	3		8	23 打製石斧	砂岩	7.3	5.3	1.8	胴部	
24	4			スクレイパー	安山岩	6.6	7.6	2.1		
24	5		10	26 打製石斧?	安山岩	6.9	4.2	2.0	頭部欠損	
24	6		8	17 石錘?	頁岩	7.2	4.3	2.0		
24	7		13	19 スクレイパー	蛇紋岩?	3.8	4.8	1.4	磨製石斧のフレークを利用	
25	1	18C	6		スクレイパー	安山岩	13.9	12.9	3.9	
25	2		7	8 スクレイパー	安山岩	8.7	5.5	1.2		
25	3	14C	4		スクレイパー	安山岩	11.9	14.8	1.3	石包丁?
25	4		10	21 スクレイパー	安山岩	9.8	10.2	1.8		
25	5		9	43 石錘	安山岩	7.4	7.3	1.5	磨石も兼ねる	
25	6	13B		31 敲打石	砂岩	12.7	5.7	4.6		
25	7	19C	5		敲打石	安山岩系?	8.4	4.4	3.5	基部欠損
25	8		5	19 磨石	砂岩	8.2	6.2	1.3		
25	9	27D	8		磨石	安山岩	7.1	5.6	1.5	
25	10		10	12 磨石	安山岩	5.4	3.7	1.5	1/4残存	
25	11		10	25 凹石	玄武岩	5.0	5.5	4.2	多孔質、1/2欠損	
25	12		10	39 凹石	安山岩	7.0	5.6	2.2		
25	13		10	46 凹石	安山岩	9.4	5.7	4.5		
25	14		10	16 凹石	玄武岩	8.7	11.5	7.1	多孔質、1/2欠損	
25	15		5	20 石皿	安山岩	5.5	12.6	2.5	裏面欠損、2/3欠損	

第2表 出土石器計測表 (単位 cm)

中部より出土しており、安山岩製。

E スクレイパー (第24図4・7、第25図1-4)

24図4、25図1-4は、板状に剥がされた安山岩製の大きめな剥片を利用し、剥片の形を利用し縁辺に僅かな剥離を加えて機能面を作成している。スクレイパーというより、打製の石包丁的な機能を持っているのではないかと思われる。24図4と25図3は第4集中部、25図1・4は第10集中部、25図2は第7集中部より出土している。

24図7は、蛇紋岩製の磨製石斧から剥がされた剥片を利用し縁辺の一部に小剥離を加え、スクレイパーとしての機能をもたせたものと思われる。第13号住より出土している。

F 石錘(第24図6、第25図5)

24図6は、頁岩製の石錘と思われるもので、両側縁に原石面を残した厚めの剝片に、抉りを両極面より加えて製作したと思われる。第8集中部より出土している。

25図5は、扁平な丸い安山製の原石の両極に、抉りをつけた石錘である。両面磨石としても利用されている。第9集中部より出土している。

G 敲打石(第25図6・7)

6・7は棒状の原石の先端部を敲打面として利用したものである。7は基部が欠損している。6は砂岩製で、第3集中部付近出土。7は安山岩系の石材で、第5集中部より出土している。

H 磨石(第25図8-10)

8-10は、扁平な丸い原石を用いている。両面を機能面としているようである。8は砂岩製で、第5集中部より出土。9は安山岩製で、第8集中部より出土。10は磨石の一部であり、安山岩製で、第10集中部より出土。

I 凹石(第25図11-14)

11は半分欠損している。11-13はやや小振りの細長の原石を用いその中央にかなり深い摺り鉢状のくぼみを設けている。11-13は安山岩製である。

14はやや大きめの円形の原石を用いている。やはり半分欠損している。中央部に摺り鉢状の大きな凹が見られる。玄武岩製である。

11-14はすべて第10集中部より出土している。

J 石皿(第25図15)

15は石皿の破片である。かなりの面を欠損している。第5集中部より出土している。安山岩製でやや方形の原石を利用しており、一部の破片であるが凹面多く、かなりの使用度であることが想定できる。

K フレーク(第23図11)

11はチャート製で、磨製の石器の一部と思われる表面の磨き痕があり、そのフレークと思われる。第4集中部で出土している。

III まとめにかえて

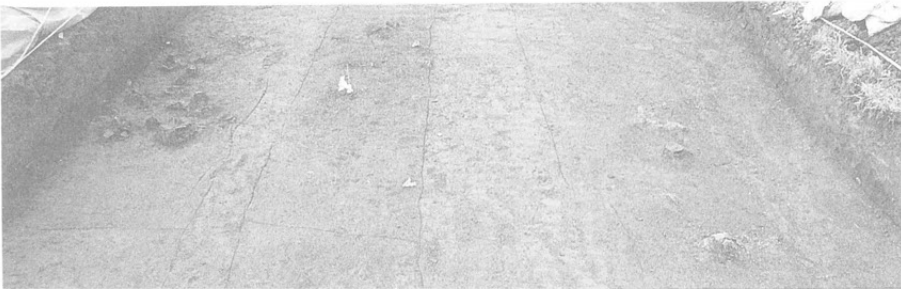
栗林遺跡は言うまでもなく、弥生中期後半栗林式土器の標識遺跡である。しかし、残念なことに良好な資料をえることはできなかった。現在においても、栗林遺跡から知られた栗林式土器は多くない。また、遺跡の構造も明確には出来ないでいる。

今回の調査は栗林遺跡のほぼ中心にあたる部分の可能性がある。調査が確認面で終了するという方法であったため明確なことは明かでないが、多くの竪穴住居の存在が予測される。また、8次調査で検出した大溝は集落の周囲に巡らされる環壕の可能性もある。大規模集落の可能性が指摘されるが確かなことは解らない。いずれにしろ、栗林遺跡の構造の解明は今後の課題であらう。

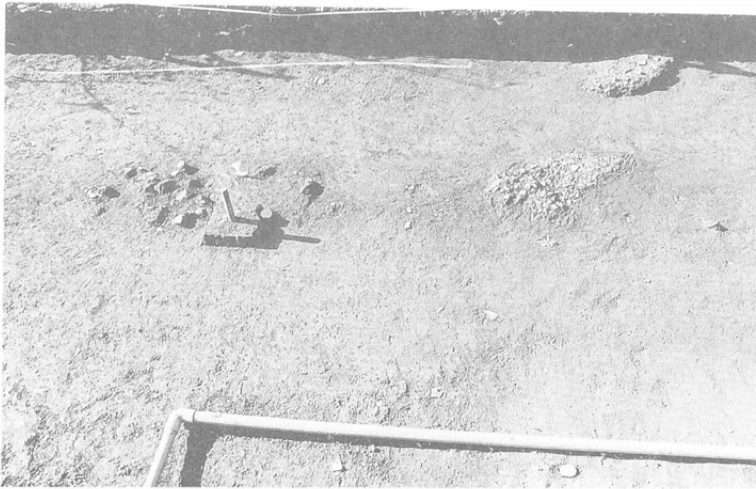
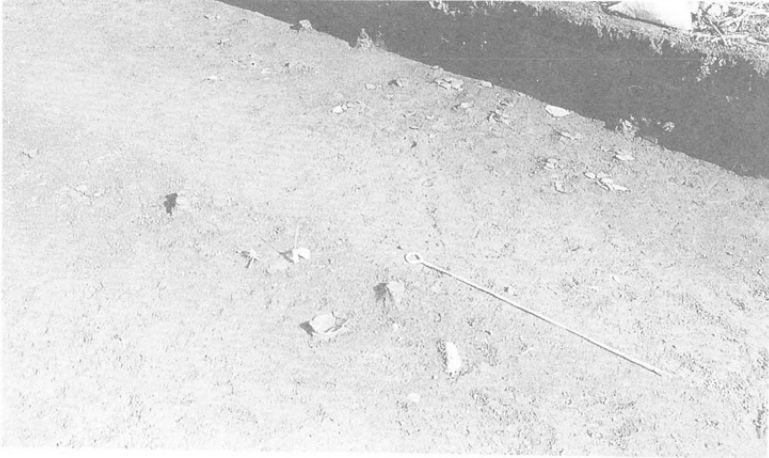
また、良く知られているように、栗林遺跡出土の土器をもって命名された栗林式土器の標識資料は長野市平柴平遺跡出土の土器に変更され再設定されている。これは一重に栗林遺跡の出土資料が少ない為に行われた措置ではある。しかし、徐々に栗林遺跡出土資料が増加するにつれて、その措置の妥当性について検討する必要があるかも知れない。



第1図版 上、調査前 下、第2集中部出土土器



第2図版 上、溝断面 中、第2、3集中部 下、第2集中部



第3図版 上、第4集中部 中、第5集中部 下、第6集中部



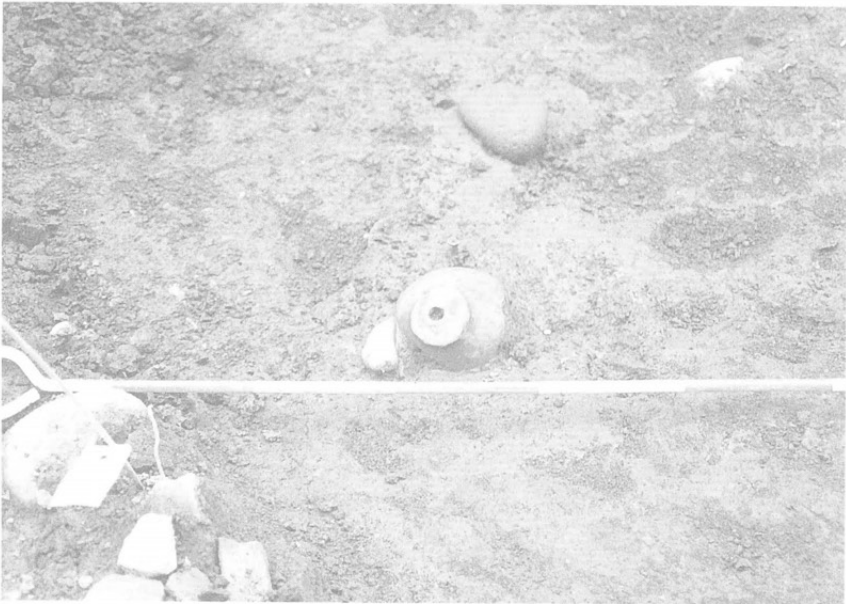
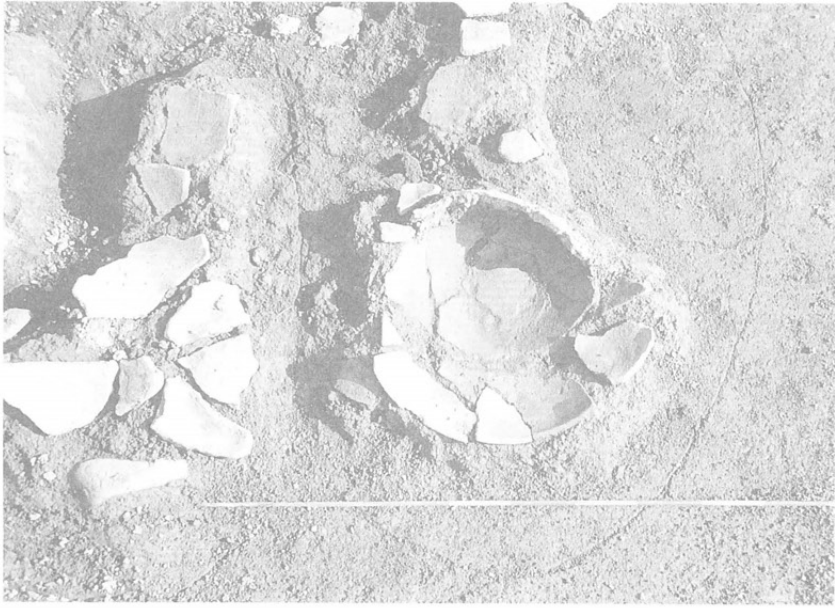
第4図版 上、第8集中部東側より 下右、蓋と小形壺 下左、第7、8集中部



第5図版 上、第9集中部出土状態 下、蓋と鉢の出土状況



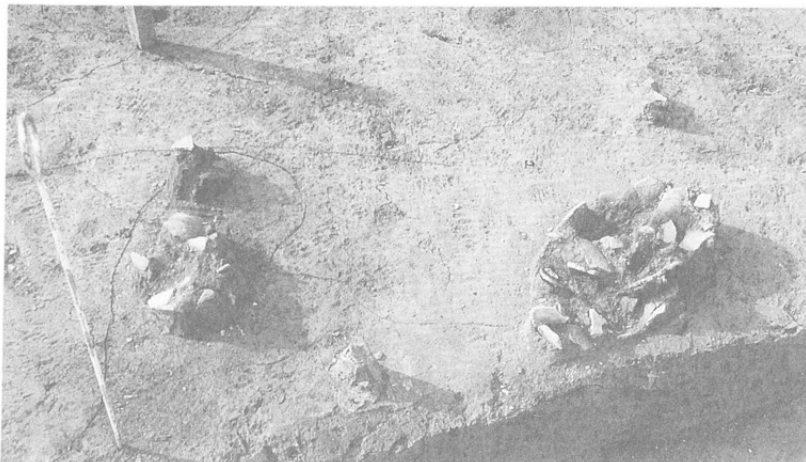
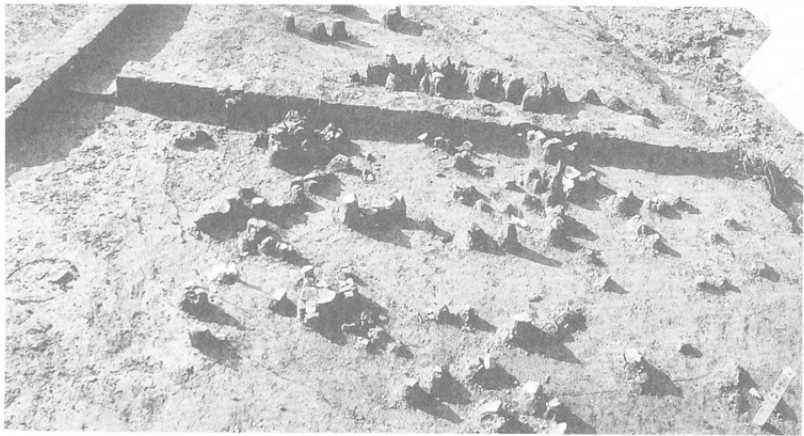
第6図版 上、第10集中部出土状態 下、第11、12集中部プラン確認状況



第7図版 上、第10集中部鉢 下、甌



第8図版 上、第11、12集中部プラン確認（東側より） 下、13号住発掘風景



第9図版 上、遺物出土状況13、14号住 中、14号住 下、15号住



第10図版 上、第14号住 中、13、14、15 号住 下、完掘（南方向より）

栗林 X
緊急発掘調査報告書

平成5年3月20日印刷

平成5年3月26日発行

発行 中野市教育委員会
長野県中野市三好町1-3-19
印刷 カナイ美術印刷

